

高麗時代の「叛逆伝」研究 I

——立伝人物の分析——

西 川 孝 雄

はじめに

1. 「叛逆伝」の作伝理由

(i) 『高麗史』の場合

(ii) 『正史』の場合

2. 『高麗史』列伝「叛逆」(一)

(i) 立伝人物史料

(ii) 「叛逆」(一)の人物分析

小結論

はじめに

『高麗史』列伝の第四十から第五十までは「叛逆」(一)から(六)までである。十一巻中の立伝人物は39名と附伝人物11名の合計50名の「叛逆」者があげられている。今回は列伝第四十(一)に見える立伝人物9名について分析検討を実施することにする。各巻の特色は王代順で何代かの王ごとにまとまっていると考えられる。列伝第四十の9名は太祖から17代の仁宗王代までの人物が含まれている。第四十六から第五十の辛禍(一)～(五)附伝昌までの辛氏二王の扱いについては「王氏王統より除外すべし」と名分派（僭擬を改めて名分を正すべしとする議論）と直書派（史実は直書すべしとする議論）の競いに決着がついたが、その後「辛氏二王を世家からはずして、列伝末尾に収め」られてようやく『高麗史』は五次の編纂過程を経て誕生したのであった⁽¹⁾。

「叛逆伝」の代表的先行研究者の姜聲媛先生は叛逆について、次の様に見ておられる。

「叛逆は大部分勝者が敗れた者を批評するものだからその評価は主観的で客観性が欠如されやすい。また、叛逆は当時の社会の葛藤と矛盾累積から表出されたために叛逆人等が主張することを正確に追跡すれば、その社会の葛藤と矛盾構造を比較的明快に把握することができる。」⁽²⁾

叛逆者達は国家や君主、体制や支配者に背いた人々であるが当時の社会の矛盾構造を

追跡して叛逆者達の再評価をしたいと考える。

さて、今回取り上げる「叛逆伝」はいかなる目的をもって作伝著述されたのであろうか。中国の『正史』二十四史中の『唐書』『宋史』『金史』『元史』等に見える「叛臣」「逆臣」の序文や贊を参考にしつつ考察することにする。

以下において先ず「叛逆伝」の作伝理由を検討し『高麗史』と『正史』の場合について比較検討してその作伝理由目的を解明したい。その「目的」を参照しつつ列伝第四十(一)の太祖から第17代仁宗王代までの立伝人物9名について分析検討してその特色を解明しよう。終わりに太祖から第17代仁宗王代までの立伝人物9名について全体をまとめて小結論とする。

1. 「叛逆伝」の作伝理由

(i) 『高麗史』の場合

前述したように列伝第四十(一)には太祖から第17代仁宗王代までの9名があげられている。その序文には「叛逆伝」の作伝著述理由が次のようにある。

孔子、作春秋、尤嚴於亂臣賊子、及據地以叛者、其誅死者而不貸、所以戒生者於後也、夫人臣忠順、則榮其身、保其宗、而美名流於後、叛逆者、未有不脂潤鼎鑊、赤其族、而覆其祀者、可不戒哉、作叛逆傳。

孔子『春秋』を作る。尤も亂臣賊子及び地に據り以て叛する者を嚴にす。其れ誅死する者は而して貸ゆるく（寛貸：刑罰をゆるくする）せず。後（世）に生きる者を戒める所以なり。

夫れ人臣が忠順なれば則ち其の身榮え、其の宗（族）を保（保存）って、美名を後（世）に流（傳）す。叛逆者は未だ脂が鼎鑊ていかく（人を刑罰でかまゆでにするのに用いた）を潤うるおさざること有らず。其の族を赤ほろぼし（誅滅）して、其の（祭）祀を覆（顛覆）す者は戒めざる可けんや。叛逆傳を作る。

大意はつぎのようである。

孔子が『春秋』を著述し、乱臣賊子（君主や親に対し道にはずれたことをする臣下や子）と一地域で割拠し反乱を起こした者に対して一層、厳格にしたのだが、死んだ者を容赦なく筆誅（其の罪惡を書きたてて責めること）することは後世に生きている者を警戒させるものであった。

大概、臣下になった者が忠順にして従順ならば、一身は榮（華）を享受し、一族（同族・一門）が保存され美しい名前を後世に伝えるようになる。しかし、叛逆する者は漏れ無く、自分の身体に惨酷（残酷）な極刑（死刑）を受けて、その一族は全滅させられてその祭祀は絶えるようになる。警戒しなくてよからうか、しなくてはならない。故に、叛逆伝を著述する。

以上、『高麗史』列伝第四十叛逆(一)の序文に見える著作理由をまとめるとつぎのよう

になる。

- ① 孔子が『春秋』を著述し、乱臣賊子と一地域で割拠し反乱を起こした者に対して厳格に対処した。
- ② 死者を容赦なく筆誅するのは、後世に生きている者を警戒させるためであった。
- ③ 臣下たる者は忠順で神妙ならば、身は榮え、一族が保存され美名を後世に伝えることができる。
- ④ 叛逆する者はすべて極刑を受けて、その一族は全滅させられ、その祭祀は絶えるようになる。
- ⑤ それ故、警戒しなくてよからうか、しなくてはならない。
- ⑥ だから、叛逆伝を著述するのであると。

次に、中国『正史』に見える代表的な「叛臣」「逆臣」の序文や賛についてその作伝理由を分析検討する。

(ii) 『正史』の場合

前述したように中国『正史』二十四史中の『唐書』『宋史』『金史』『元史』等に「叛臣」「逆臣」等の序文又は賛（論賛・評論）が見える。その作伝理由についてみることにする。

- ① 『唐書』列伝第149上・下叛臣と列伝第150上・中・下逆臣の上・下に賛がある。
唐書一般からみた大乱の発生と叛臣・逆臣について述べているが、人物論である⁽³⁾。
- ② 『宋史』列伝第234「叛臣」上に「序文」が見える⁽⁴⁾。
宋史一般からみた「召乱之道」と「大義」について述べ、「叛臣伝」を作ると述べている。
- ③ 『金史』列伝第71叛臣には次のようにある。

古書「畔」與「叛」通、畔之爲言界也。左氏曰、政猶「農之有畔」、是也。君臣上下之定分、猶此疆彼界之截然、違此向彼、卽爲叛矣。善惡判於跬步、禍患極於懷襄、吁、可畏哉！作叛臣傳。

古書には畔はあぜとそむくの両義があり、叛とも相通ずる。『左伝』の襄公二十五年十二月条に見える子大叔が子産に政道を問い次の様に答えている。「政^{まつりごと}は農功の如し。(中略)農の畔^{あぜ}有るが如くならば、その過^{あやま}ち鮮^{すくな}し」と。「政治は百姓仕事のようなものだ。(中略)あたかも百姓の耕す田畑に畔(あぜ)があつて、それ以外には手を出さないようにすれば、過ちというものはめったにないものです」と。(鎌田正著『春秋左氏伝』三、明治書院刊、1063頁)政道とは即ち、まさにこのことである。

君臣上下の定分(定まった身分)は境界が截然^{せつぜん}(区別がはっきりしている)としており、「違此向彼、卽爲叛矣」といわれ「善惡は跬^き歩^ほ(半歩)でわかれる」とあ

る。「吁（ああ）、畏（いましめる）べきかな」として「叛臣伝」を著わしたと、その目的を述べている。

次に、同じく『金史』列伝第70逆臣に作伝理由が次のようにある。

昔者孔子作春秋而亂臣賊子懼，其法有五焉：微而顯，志而晦，婉而成章，盡而不汙，懲惡而勸善。夫懲惡乃所以勸善也，作逆臣傳。

昔「孔子『春秋』を成（作）りたまいて乱臣賊子（君主や親に対し道にはずれたことをする臣下や子）懼る」（『孟子』滕文公章句下）とあり、「孔子が『春秋』を作られたので、世の乱臣・賊子は自分の非を恥じ、かつ恐れるようになった」⁽⁵⁾。其の語法は五つ有るとして『春秋左氏伝』成公14年9月条の文を引用している⁽⁶⁾。結局、「夫れ惡を懲しめるは乃ち、善を勸める所以（理由）なり」として、逆臣伝を著わしたとその目的を述べている。

④『元史』列伝第93と第94に叛臣伝がある。編年体になっていて序文や贊はない。作伝目的が明らかにされていない。

以上、『正史』にみえる「叛臣伝」「逆臣伝」の作伝目的の要点をまとめる。

①『金史』に見える「叛臣伝」では君臣上下の身分は田畑に畔（あぜ）があるように境界をはっきりしているので「違此向彼」すれば「叛と為る」のである。その善悪は「半歩」の差でわかれる。ああ、いましめるべしとして「叛臣伝」を著わした目的を述べている。

②次に、『金史』に見える「逆臣伝」では孔子が『春秋』を作られたので、世の乱臣・賊子は自分の非を恥じて、恐れるようになった。勸善懲惡を目的として逆臣伝を著わしたとその目的を述べている。

以上のように「逆臣伝」「叛臣伝」を著わした目的は君臣上下の身分は境界をはっきりしておりまちがってこえれば「叛」と為る。その善悪は「半歩」の差でわかれる。ああ、いましめるべきである。次に、孔子が『春秋』を作られ世の乱臣・賊子は自分の非を恥じて、恐れるようになった。逆臣伝を著わしたのは勸善懲惡を目的としていたことが判明した。

2. 『高麗史』列伝「叛逆」(一)

(i) 立伝人物史料

前述したように列伝第四十「叛逆伝」(一)には立伝人物9名があげられている。「叛逆伝」「逆臣伝」「叛臣伝」等を著作した目的について要点をまとめると、①乱臣賊子や地方での反乱者には厳格に対処する。②死者に筆誅をするのは後世に生きる者に警戒をさせる為である。③臣下として忠順で従順ならば一族は榮華を享受出来、美名を後世に伝えられる。④叛逆者はすべて共謀罪で極刑（死刑）を受け一族は全滅させられる。⑤君臣上下の定分は境界が截然としており、そこを越えれば「叛」となる。⑥勸善懲惡を目

的とした等の諸点が判明した。以下において「叛逆者」と云われた人々が生きた当時の社会の葛藤と矛盾構造を分析し、何故「叛逆」に立ち上がったのか、各人物についてその特色を考察検討することにする。

(1) 桓宣吉 (?～918) (太祖 1)

桓宣吉は高麗朝初期の叛逆者で馬軍將軍(騎兵。馬軍を率いて指揮する將軍)であった人物である。世家卷一太祖元年六月庚申(19日)条に「馬軍將軍桓宣吉、謀逆伏誅」とだけある。彼は謀逆して誅に伏された。「叛逆伝」によってその謀逆動機・参加者・解明端緒と結末等をみて最後に謀叛顛末の寸評を加えることにする。その伝記は大略、次のようである⁽⁷⁾。

(史料 1)

高麗の馬軍將軍なり。太祖元年叛を謀り誅に伏す。初め宣吉其の弟香^{しよく}寔^{しよく}と俱に翊戴^{よくたい}の功あり。太祖委するに腹心を以てし、常に精銳を率い以て宿衛せしむ。其の妻謂て曰く、子の才力人に過ぎ士卒服従す。又大功あり。而るに政柄人に在り、懐^おいざるべけんやと。宣吉心に之を然りとし、陰に兵士と結び隙^{すき}を伺い變を爲さんとす。馬軍將ト智謙これを知り、密かに王に告ぐ。王、迹の未だ形はれざるを以て納れず。一日太祖殿上に坐し學士數人と國政を議す。宣吉其の黨五十餘人と與に兵を持し、内庭に突入し、直ちに之を犯さんと欲す。太祖杖を策して立ち厲聲^{れいせい}(声をあらげらる)之を叱して曰く、朕汝が輩の力を以て此に至るといへども、豈天に非ずや、天命已に定まる、汝敢て爾^{しか}るやと。宣吉太祖の辭色自若なるを見、伏兵ありと疑い、衆と與に走り出づ。衛士追って之を殺す。

武臣桓宣吉について、①叛逆時の王名と年代は太祖王建、元年(918年)である。②出自と官職は、(イ)馬軍將軍、(ロ)弟香^{しよく}寔^{しよく}と「翊戴^{よくたい}(主君を助けて上にいただく)の功」を受ける。③王朝の待遇は、(イ)太祖、腹心とする。(ロ)精銳を率いて宿衛せしむ。④動機は妻曰く「子、才力(才智と力量)人に過ぎ、士卒服従し、又大功あり。而も政柄(政權)人に在るは懐^おい(うれえもだえる)ざるべけんや」と。宣吉「之^{これ}を然り」とする。陰に兵士と結び變をなさんとする。⑤参加者は其の黨五十餘人と兵を持して内庭(禁庭の内)に突入。太祖を犯さんと欲す。⑥解明端緒と結末は馬軍將のト智謙これを知り、密かに王に告げた。王は痕跡が残らず不問に付した。結末は、(イ)太祖の辭色(ことばと顔色)、自若(落ち着いて動じないさま)なるをみて、伏兵ありと疑い、衆とともに走り出る。(ロ)衛士(護衛兵)これを追って殺す。弟も殺された。

謀叛顛末寸評は次の通り。妻が言うのに子は才力あり、士卒は服従し大功があった。政柄(權)は他の人に在りうれえざるをえないと。宣吉はその意見を「然り」とした。黨五十餘人と兵士を持し、禁庭に突入したが太祖に大声で叱り付けられ伏兵ありとみて衆とともに退散した。追手の護衛兵に殺された人物である。宣吉は政權奪取の動機といひ計画といい、用意周到でなく妻の意見に従っただけである。待遇に不満があったとは

思えない。太祖から「天命已に定まる」といわれ力関係の分析不足と状況判断のあやまりが失敗因であろう。勝者の記述であるため謀叛者本人の考え方を知る記述が欠如しているといえよう。

(2) 伊昕巖（?～918）（太祖）

伊昕巖^{い きんがん}は高麗朝初期の叛逆者で馬軍大將軍であつた人物である。世家卷一太祖元年六月己巳（28日）条に「馬軍大將軍伊昕巖，謀叛棄市」とだけある。彼は謀叛によって棄市^{きし}（死刑）になっている。「叛逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略、次のようである⁽⁸⁾。

（史料2）

弓馬を業とし、他の才識無し。利を見て求むるに躁^{さわが}し。弓裔^{こうぎよ}に事へ鉤距を以て任用せらる。弓裔の末、兵を將^{ひき}いて襲いて熊州を取り、因て之を鎮す。高麗太祖位に即くと聞き、僭に禍心を懷き召されずして自ら至る。士卒多く亡げ、熊州復た百済の有となる。韓槩・守義刑臺令、閻萇^{えんちやう}・昕巖と比隣す。萇其の陰謀を知り具に太祖に奏して曰く、昕巖鎮を棄てて自ら來り以て邊疆を喪う、罪實に原し難し。然れども我と並肩^{へいけん}して主に事う。情分、素^{もと}あり、誅を加うるに忍びず。且つ其の反形未だ露われず。彼必ず辭有らん。請う密に之を伺わしめよと。太祖内人を遣りて萇の家に至り、帳中より之を候わしむ。昕巖の妻桓氏^{ゆばり}厠に至り人無しと思い、旋ありて、長吁^{ちやうく}して曰く、吾夫の事若し諧^{かな}わざれば吾れ禍を受けんと。言い訖りて内に入る。内人狀を以て聞す。遂に獄に下し具服す。百僚をしてその罪を議せしむ。皆曰く誅に當すと。太祖親ら之を讓めて曰く、汝素と兇心を蓄えて自ら刑辟に陷る、法は天下の公なり、私に撓^なぐべからずと。昕巖但だ流涕のみ。遂に市に斬り其の家を籍せしめ、黨與を問わず。

武臣伊昕巖について、①叛逆時の王名と年代は太祖即位直後918年頃である。②出自と官職は「弓馬を業とし、他の才識無し。」後高句麗の創始者弓裔（?～918）の末年に馬軍大將軍であつた。③王朝の待遇は弓裔に任用されて熊州（忠清南道公州）を取り鎮している。太祖即位すると聞き禍心（災いを起こす心）を懷き自ら至っている。その為に熊州を再び百済に奪い取られている。弓裔は末年専制君主として暴君に転落しており待遇も決して良いとはいえないであろう。④動機は太祖即位を聞き「僭に禍心を懷き召されずして自ら至つ」ている。守義刑台令閻萇等と昕巖は比隣（となり近所）であつた。萇は陰謀を知り、太祖に奏上して「其の反形（叛逆の形迹）未だ露われず」密にかがわしめよという。太祖は内人（宮中に仕える宮人）をやり調べさせた。昕巖の妻桓氏は厠で旋（ゆばり）ありて長吁^{ちやうく}（深く嘆息する）して「吾夫の事若し諧^{かな}（うまくかなう）わざれば吾れ禍を受けん」と云った。内人は狀を以て上聞するにいたつた。⑤参加者は「黨與（なかも徒黨）を問わず」とあるので徒黨がいたことが判明するが員数は不明である。⑥解明端緒と結末はとなり近所の住人守義刑台令閻萇等が陰謀を知り、太祖

に上奏したが「反形未だ露われず」、太祖は内人に調査させた。妻が厠で云った「吾夫の事若しかなわざれば吾れ禍を受けん」の一言によって内人が上聞した。遂に獄に下し具服（逐一白状して獄に服す）した。百僚に其の罪を議せしめて太祖は「法者天下之公」なり「私にまげるべからず」と云って、「遂に市に斬り其の家を籍（籍没、罪人の財産を帳簿にしるして取り上げる）せしめ、党與を問わず」共謀罪で極刑に処した。

謀叛顛末寸評は次の通り。専制君主弓裔に任用されていた伊昕巖は近所に住む守義刑臺令閻萇等がその陰謀を知り太祖に上奏したが反逆の形迹は認められなかった。調査の結果妻が厠でもらした「吾夫の事若しかなわざれば吾れ禍を受けん」の一言により徒党一味と謀叛を企てたとみられ獄に下され具服し極刑に処せられた人物である。昕巖は専制君主弓裔のもとを去っており、待遇に不満があったと思われるが、謀叛の計画を知る具体的な記述は何もない。太祖から「汝素と兇心を蓄えて自ら刑辟（刑罰）に陥る」と云われ「禍心を懐い」ていたと見られている。妻の厠での一言により「反形」の証拠は認められなかったが極刑となっている。謀叛者本人の考え方を知る記述が欠如しているといえよう。

(3) 王規 (?~945) (惠宗 2)

王規^{おうき}は京畿道広州地方の豪族で太祖に仕えて大匡^{だいきやう}（国初の宰相）となった人物である。姉妹の2妃を入れて第十六妃が一子を生み「広州院君」と言う。世家卷二には（惠宗二年九月）「己酉（16日）王規謀逆伏誅」とある。彼は謀逆によって斬殺されている。「叛逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ、次のようである⁽⁹⁾。

(史料 3)

廣州の人。高麗太祖に事えて大匡^{だいきやう}と爲る。太祖其の二女を納れ、一を第十五妃と爲し、一を第十六妃と爲す。十六妃一子を生む、廣州院君と曰う。惠宗二年規、王弟堯及昭に異圖有りと譖^{しん}す。惠宗其の誣なるを知り、恩遇愈々厚し。司天供奉崔知夢奏す、流星紫微を犯す、國に必ず賊有らんと。惠宗意えらく、是れ規が堯昭を害さんと謀るの應なりと。乃ち長公主を以て昭に妻わせ、以て其の族を強うす。規其の謀を行ふを得ず。規又廣州院君を立てんと欲し、嘗て夜王の熟睡を伺い、其の黨を遣り、潛に臥内に入らしめ、將に大逆を行わんとす。惠宗之を覺り、一拳して之を斃し、左右をして曳き出さしめ復た問わず。一日惠宗遑豫（病氣）、神德殿に在り。知夢又奏す。近く將に變有るべし、宜しく時を以て移御すべしと。惠宗潛に重光殿に徙る。規夜其の黨を率いて壁に穴して入れば寢已に空し。規知夢を見て劒を抜て之を罵て曰く、上の寢を移せしは必ず汝の謀ならんと。知夢竟に言無し。規乃ち退く。惠宗又措て罪せず。規嘗て大匡朴述熙を惡み、惠宗薨ずるに及んで、定宗の命を矯めて之を殺す。初め惠宗疾篤きや、定宗規が異志有るを知り、密に西京の大匡王式廉と謀りて以て變に備う。規亂を作すに及び、式廉兵を引て入衛し、規

敢て動かず。乃ち執えて甲串に竄し、人を遣りて追て之を斬らしめ、其の黨三百餘人を誅す。

宰臣王規について①叛逆時の王名と年代は第2代王惠宗2年(945年)である。②出自と官職は京畿道広州地方の豪族出身で太祖に仕えて大匡(宰相)となった。③王朝の待遇は姉妹の2妃を入れて、その第十六妃に一子を生ませて「広州院君」と云わせている。惠宗2年に規は王弟堯(第三代王定宗)及び昭(第四代王光宗)に「異図(むほんのはかりごと)有り」と譖(うったえる)す。惠宗王は誣(いつわり)なるを知り、堯(定宗王)等を恩遇した。王規に誣言があったのからすれば厚遇されていたとは思っていないようである。④動機は「広州院君」を立てんことを謀って、夜王の睡熟を伺い、其の党を遣り臥内に入らしめ、將に大逆を行わんとしたのである。王はこれに気づいて賊を左右をして一旦は追い出し、不問とした。再び其の党と壁に穴して入ったが、王は移りいなかった。また、罪されなかった。王規はまた、大匡朴述熙を惡み、殺した。定宗は西京の大匡王式廉と謀り變に應ぜんと準備した。式廉は兵を引いて入衛待機したが、規は動かなかった。京畿道江華郡甲患に追放された。⑤参加者は「其の党」であるが「其の党三百余人を誅す」とある。⑥解明端緒と結末は二度の謀叛と三度目の大匡王式廉の「兵を引て入衛」したが、作乱者規は敢えて動かなかった。しかし、執えられ追放され結局、斬殺されてしまった。謀叛顛末寸評は第十六妃に一子を生ませて「広州院君」とした。王室の内乱に乗じて「広州院君」を立てんと謀叛をはかったが、失敗をしてしまう。計画性に欠け協力者にだまされ追放され斬殺されてしまう。結局、第十六妃の生んだ「広州院君」を立てんとして失敗をかさねてしまった人物といえる。謀叛の計画を知る謀叛者本人の考え方を知る記述が欠如しているといえよう。

(4) 金致陽(?~1009)(穆宗12)

金致陽は穆宗代の権臣である。洞州(黃海道瑞興郡)の人で、第7代王穆宗の母獻哀太后皇甫氏の外族で性は姦巧(悪がしこい)で陰莖が関輪(車輪ほど)で祝髮(断髪して僧となる)して千秋宮に出入しすこぶる醜声のあった人物である。成宗はそれを知り、遠地に杖配した。乱をおこし誅された。「叛逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略、次のようである⁽¹⁰⁾。

(史料4)

洞州(黃海道瑞興郡)の人。高麗穆宗の母獻哀太后皇甫氏の外族なり。性奸巧、嘗て詐りて祝髮し、千秋宮に出入し、頗る醜聲あり。成宗之を知りて、遠地に杖配せしが、穆宗位に即くに及び、召し還されて閤門通事舍人(朝会と儀礼に関する事を担当する官衛。文宗代以後正7品職)となる。千秋宮は太后の居る所にして、時に千秋太后と稱す。爾後數年ならず貴寵比なし。驟かに遷て右僕射兼三司事に至り、百官の與奪皆な其の手に出で、親黨朝に布列し、勢中外を傾け、大に邸第を起し、臺榭園池、美麗を極め、日夜太后と遊戲して更に畏忌する所なし。又農民を役

して祠を洞州に立て、額を星宿寺と曰い、又宮城の西北隅に十王寺を建て、其の圖像奇怪異状を極む。蓋し潛に異志を懷き以て陰助を求めんとせしなり。器皿の類亦皆其の意を銘し、其の鍾銘には當生東國之時、同修善種、後往西方之日、共證菩提とあり。以て其の志の存する所を知るべし。穆宗常に之を黜^{しりぞ}けんと欲せしも、母の志を傷^{そし}らんことを恐れて果たさず。後ち太后致陽の子を生み、相謀りて王の後を嗣がしめんとし、大良君詢(第8代王顯宗)を忌み、迫りて強て出家せしめ、屢之を害せんとす。十二年春二月王疾あり。致陽之に乗じて將に事を舉げんとす。嬖臣劉忠正竊に上書して變を告ぐ。王給事中蔡忠順を臥内に召し、密に議して亟^{すみやか}に儲貳^{ちよじ}(よつぎ・太子)を定め、以て親親^{きん}(すきをうかがう)の端を絶たんとし、宣徽判官皇甫俞義を遣り、急に大良君を神穴寺に迎えしむ。致陽之を知りしが、逡巡決せざること數日、時に王西北面都巡檢使康兆を徴し、入衛せしむ。兆遂に廢立を圖り兵を領して來りて闕を犯し、王を廢して讓國公と爲し、大良君を立てて王と爲し、次で兵を遣り、致陽・庾行簡等七人を誅し、其の黨及び太后の親屬李周禎等三十餘人を海島に流し、王及び太后を忠州に放ち、途に王を弑し、太后は黃州に遜^{のがれ}る。致陽の亂此において始めて平ぐ。

権臣金致陽について①叛逆時の王名と年代は第7代王穆宗「十二年春二月王疾あり。致陽之に乗じて將に事を挙げんとす」とあるとおり1009年のことである。②出自と官職は黃海道洞州(瑞興郡)出身で、穆宗の母獻哀太后皇甫氏の外族で閤門通事舍人(文宗王代以後正七品職)の権臣である。③王朝の待遇は穆宗位につくや召し還されて閤門通事舍人となっている。「勢中外を傾く」ほどであったから優遇されていたといえよう。母獻哀太后との関係があったからである。④動機は「後ち太后致陽の子を生み、相謀りて王の後を嗣がしめん」としたが穆宗は太祖の孫の「大良君(詢後ちの第8代王顯宗)を立てて王と爲し」たのである。⑤参加者は「致陽庾行簡等七人を誅し、其の党及び太后の親屬李周禎等三十餘人を海島に流し、王及び太后を忠州に放」ったとある。⑥解明端緒と結末は前述のように致陽は誅され、党及び太后の親屬等三十餘人を海島に流され太后は黃州にのがれ王を弑して乱は結末をむかえた。端緒は嬖臣劉忠正がひそかに上書して變を告げたのである。

謀叛顛末寸評は穆宗の母獻哀太后が致陽の子を生み相謀って王の後を嗣がしめんとした王位繼承争いである。穆宗の母が関係した乱であるが致陽の考え方を知る記述が欠如しており、いつも勝者の理論で全体が組み立ててあるといえよう。

(5) 康兆(?~1010)(顯宗1)

康兆^{こうちょう}は第8代王顯宗代の武臣である。第7代王穆宗代に中樞院使・右散騎常侍・西北面都巡檢使となった人物である。「叛逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ、次のようである⁽¹¹⁾。

(史料5)

遼史康肇に作る。高麗穆宗の時官を累ねて中樞使右常侍に至り、出て西北面都巡檢使と爲る。時に千秋太后（第7代穆宗の母）の外戚右僕射金致陽太后と通じて子を生む。穆宗子なく繼嗣未だ定まらざるに乘じ、密に太后と共に纂立を謀る。穆宗之を知り、中樞院副使蔡忠順を召して密に議し、^{すみやか}亟に太子を立てんとし、宣徽判官皇甫俞義を三角山神穴寺に遣り、太祖の孫大良君詢（第8代顯宗）を迎えしめ、仍ち兆を徴して兵を引て入りて衛らしむ。^{まも}兆命を聞き發して洞州（瑞興）龍川驛に至る。時に内史主書魏從正安北都護掌書記崔昌會も事に坐して黜^{しりぞ}けられ、深く朝廷を怨み、常に亂を構えんと欲し、相與に兆に謁し、^{あざむい}給て言わく、主上疾篤く、命^{けいこく}頃刻（少しのあいだ）に在り機に乘じ太后致陽と將に社稷を奪はんと謀る。然るに公が大兵を擁して外に在り、或は従わざらんことを恐れ、詐りて君命と稱し、召して之を除かんとするなり。宜く速に本道に還り、大に義兵を擧げて國難を救い、以て生命を全うすべしと。兆之を然りとし、且以爲えらく、王已に薨^{こう}じ、朝廷悉く致陽に誑誤^{かいご}（あざむいて人をまきこんで罪を犯させる）せられたらんと。便ち發して本營に歸る。太后は兆の來るを恐れ、内臣を遣りて崑嶺^{くわんりやう}の關（慈悲嶺の異稱）を守り、人の來往を嚴査せしむ。兆の父之を思い、密書を竹杖の中に納れ、奴の髪を剃りて僧と爲し、^{いつわ}詭りて妙香山の僧と稱せしめ、兆に報じて云う、王已に薨じ、姦兇事を用う。宜しく兵を擧げて來り、以て國難を靖定すべしと。兆愈^{いよいよ}王の薨を信じ、遂に副使吏部侍郎李鉉雲等と甲卒五千を領して平州に至り、始めて王の未だ薨ぜざるを知り、喪神垂頭すること良久し、諸將曰く、已に來れり止むべからずと。兆之を然りとし、遂に意を廢立に決し、進んで京に入り、分司監察金應仁を神穴寺に遣り、顯宗を迎えしめて之を擁立し、穆宗を廢して讓國公と爲し、兵を遣りて致陽父子等を殺し、太后の親族並に致陽の黨を遠流に處す。尋で穆宗を忠州に移さんとし、途に積城縣に之を弑す。顯宗功を論じ、兆を以て中臺使と爲し、鉉雲を副使とし、尋で兆に吏部尙書叅知政事を授く、元年五月契丹の聖宗將に兵を發し、兆が弑君大逆の罪を問わんとすと聞き、顯宗兆を以て行營都統使と爲し、鉉雲及び兵部侍郎張延祐を副とし、兵三十萬を率いて通州に屯し、以て之に備えしむ。冬十一月聖宗自ら步騎四十萬を將い、義軍天兵と號し、鴨綠江を渡りて興化鎮を圍む。兆兵を引て通州城南に出で、軍を分ちて三と爲し、水を隔てて陣す。一軍は州西に營し、三水の會に據る。兆其の中に居る。一軍は州近の山に陣し、一軍は城に附して營す。兆劔車（戰鬪に使った車的一種）を以て陣を排し、丹兵入れば則ち劔車合撃し摧靡^{さいび}（くじけなびく）せざるなく、丹兵爲に屢却^{しりぞ}く。此において兆頗る敵を輕ろんずるの意有り。陣中において人と某^き（遊戲の名）を彈ず。契丹の先鋒耶律盆奴等遂に三水の砦^{とりで}を擊破す。鎮主丹兵至るを告ぐ。兆信ぜずして曰く恰も口中の食の如し。少なれば則ち不可なり。宜しく多く入らしむべしと。再び告げて曰く、丹兵已に多く入ると。兆驚き起て曰く、信かと、恍惚として穆宗の其の後に立つを

見る。叱^{しつ}して曰く、汝が命休せり。天伐^{なん}詎ぞ逃るべけんやと。兆^{ちやう}即ち^{ぼうぼう}整^{せい}牟^ぼを脱し(降参し)、跪^{ひざまずき}て曰く、死罪死罪と。言未だ訖^{おわ}らず。丹兵已に至り、兆を縛^{ばく}して裹^{つつ}むに^{もうせん}襁^{けつ}を以てし之を載せて去る。鉉雲も亦執えらる。聖宗兆の縛を解き、再三降を諭せしが降らず。剛^か(肉と骨を裂きわける)して之に迫るも屈せず。又鉉雲に諭す。鉉雲對て曰く、兩眼既に新日月を瞻^みる。一心何ぞ舊山川を憶^{おも}わんと。兆怒りて鉉雲を蹴^{けつ}て曰く、汝は是れ高麗人、何ぞ此言あるやと。契丹遂に兆を誅す。

武臣康兆について①叛逆時の王名と年代は顯宗元年(1010年)に契丹の聖宗が兵を發して、兆の「弑君大逆の罪を問わんとすと聞き」出兵するが「契丹遂に兆を誅す」とあり康兆は縛され誅殺されている。②出自と官職は出身は不明であるが穆宗の時中樞使右常侍や西北面都巡檢使となっている。顯宗の時、中台使と吏部尚書參知政事となっている。③王朝の待遇は高い官職を与えられて優遇されていたといえよう。④動機は康兆は「前王誦(第7代王穆宗)の朝廷に服事するや久し。今逆臣康兆、君を弑して幼を立」て契丹の聖宗から「弑君大逆の罪」を問われたのである。⑤参加者は「康兆の政変」により王室の人々兵士等多くの人々がかかわっていた。契丹の聖宗から「弑君大逆の罪」で誅殺されている。⑥解明端緒と結末は前述のように契丹から「弑君大逆の罪」を問われとらえられて誅殺された人物である。謀叛顯末寸評は契丹から「弑君大逆の罪」を問われつかまり誅殺されている。国内の政変が契丹から問い質されて決着をつけたといえよう。

(6) 李資義(?~1095)(獻宗1)

李資義は第13代王宣宗時代の文臣である。中書令子淵の孫で、侍中嬪の子である。宣宗の朝に戸部尚書、獻宗代に中樞院使になった人物である。「叛逆伝」によってその謀叛顯末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略、次のようである⁽¹²⁾。

(史料6)

高麗の中書令子淵の孫。侍中嬪の子なり。宣宗の朝戸部尚書に累遷し、獻宗元年中樞院使を拜す。宣宗資義の妹、元信宮主を納れ、漢山侯昀を生む。獻宗幼弱にして疾有り、政を聽く能わず。母后國事を專にす。資義貨財を貪り、無賴の徒を集め、騎射を以て事と爲し、常に曰く、主上疾有り、旦夕を保し難し。若し外邸^きに窺^め視する(すきをうかがう)者有らば、汝が輩宜しく力を盡くして漢山侯を奉ずべし。神器をして他人に歸せしむる勿れと。兵を禁中に聚めて大事を擧げんと欲す。時に肅宗鷄林公と爲りて明福宮に在り。密かに之を知り平章事邵台輔に諭して曰く、國家の安危宰相に繫^{つな}がり。今事急なり、公其れ之を圖れと。台輔仍て上將軍王國髦^{もう}(?~1095)をして兵を領して入衛せしめ、先づ壯士高義和(1049~1119)をして資義を宣政門内に斬らしめ、其の黨閭門祗候張仲・中樞院堂後官崔忠伯等を宣政門外に誅し、兵士を分遣し、資義の子注簿^{しやく}緯^{しやく}・興王寺大師智炤^{ちしょう}・將軍崇列・澤春・中郎將郭希・別將成甫・成國・校尉盧占・隊正裴信等十七人を捕えて皆之を

殺し、平章事李子威等五十餘人を流せり。

文臣李資義について①叛逆時の王名と年代は「獻宗幼弱にして疾有り、政を聴く能わず。母后国事を専にす」とあり、「兵を禁中に聚めて大事を挙げんと欲」したので、第14代王獻宗元年に「壯士高義和をして資義を宣政門内に斬らしめ」ている。獻宗元年(1095)に叛逆をくだて斬せられている。②出自と官職は侍中^{てい}頌の子であり、中樞院使を拜している。③王朝の待遇は宣宗資義の妹元信宮主を納れ、漢山侯^{いん}昀を生んでいるところから優遇されていたとみられる。④動機は①で述べたように獻宗が幼弱なのを理由に挙兵している。⑤参加者は「十七人を捕えて皆之を殺し、平章事李子威等五十余人を流」している。賊党の妻子は奴婢とされている。⑥解明端緒と結末は第15代王肅宗が鷄林公の時、「密かに之を知」ったのである。将士高義和をして資義等を斬らしめている。前述のように関係者は誅殺されたり流配されたりしている。謀叛顛末寸評は獻宗の幼弱を理由に挙兵している。資義は貨財を貪り、「勇士を集め、騎射を以て事と為」した人物である。関係者17名が誅殺され50余人が流配されている。資義の考え方を知る記述が欠如しているといえよう。

(7) 李資謙 (?~1126) (仁宗4)

李資謙^{りしけん}は第17代王仁宗時代の戚臣(人君と戚誼がある臣下)である。門蔭(父祖の功績によって官位を授けられること)を以て進み、閤門祗候となった。また、2代の王に姉妹の数女を納れて「にわか^{にわか}に貴く」なった人物である。「叛逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記の概略は次のようである⁽¹³⁾。

(史料7)

高麗の中書令子淵の孫。慶源伯顥^{こう}の子なり。門蔭を以て進み、閤門祗候となる。女弟順宗の妃となり、順宗薨じて宮奴と通ず。資謙坐して官を免ぜらる。睿宗資謙の第二女を納れて妃と爲す。是より驟^{にわか}に貴く、開府儀同三司守司徒中書侍郎同中書門下平章事に至り、尋で邵城郡(仁川)開國伯に封ぜらる。王薨じ、太子尙お幼にして、諸弟頗る覬覦の心有り。資謙即ち太子を奉じて位に即かしむ。是を仁宗と爲す。王資謙を中書令に拜し、爵を侯に陞し、尋で冊して亮節翼命功臣中書令領門下尙書都省事判吏兵部西京留守事朝鮮國公と爲し、府を開き僚屬を置かしむ。資謙他姓の入りにて妃と爲り、權寵(權力があつて君主の寵愛を受けること)の分れんことを恐れ、強て其の第三女を納れて妃と爲す。權勢隆々、禮數(格式)太子^{みな}に視し、其の生日を仁壽節と號す。族屬黨與、朝廷に布列し、諸子の第宅^{がいほく}街陌(街のとお)りに連亘^{れんこう}(長くつらなりつづく)し、勢焰甚だ熾に、官を賣り爵を鬻ぎ、四方の饋遺^{きい}(贈り物)輻輳^{ふくそう}(物事が四方から集まる)し、腐肉常に數萬斤と稱せらる。資謙又王を要して知軍國事とならんと欲す。王心に其の潛越を怒る。内侍金榮安甫鱗等常に左右に侍し、王の意を揣り、密に知樞密智祿延等と圖り、資謙を捕えて遠地に流さんと欲し、上將軍崔卓・吳卓・大將軍權秀・將軍高欽^{かん}等をして事を舉げし

めしが、却て資謙の爲に破られ、皆其の殺す所と爲り、桀は遠地に流さる。此亂に宮闕兵燹（戦争のために起こる火事）に罹り悉く烏有に歸し、唯だ僅に山呼・賞春・賞花の三亭と、内帝釋院の廊廡（回廊）數十間を残すに過ぎず。王西院に移御せしが、左右皆資謙の黨にして、動止飲食も亦た自由ならず。百僚も移りて附近の寺館に寓せしが、惟だ員に備わるのみ。國事は皆資謙の黨の「擅」にすする所たり。資謙遂に不軌（叛逆を謀る）を圖らんと欲し、毒を餅中に置きて妃をして（李資謙の第四女）王に進めしむ。妃密に王に白し、投じて烏に與えれば烏即ち斃る。又毒藥を送りて之を進めしむ。妃枕を奉じ陽り蹶て之を覆す。時に資謙の姻戚拓俊京資謙と隙有り。王密に優諭して力を王室に致さしむ。俊京遂に兵部尙書金珣等と義を挙げ、資謙を囚えて靈光に流し、悉く其の一族黨羽を除き。資謙幾くも無く配所に死せり。

戚臣李資謙について①叛逆時の王名と年代は資謙は「王を要して知軍国事とならんと欲す。王心に其の潜越を怒」りて、「資謙を捕えて遠地に流さんと欲」したがかえって敗れてしまう。この乱のため王宮は「烏有に帰」してしまった。国事は皆資謙の党のほしいままにする所となり、王を毒殺しようとした。彼は姻戚の拓俊京にとらえられ全羅道の靈光郡の貶所（官位を下げて遠方の地へ左遷された所）で死んだ。時に第17代王仁宗4年（1126年）である。②出自と官職は「慶源伯顥」の子である。官職は門蔭を以て進んだ人物である。③王朝の待遇は二代の王に姉妹を数人納れてにわかに貴くなった。④動機は王の戚臣として権力をにぎり国事をほしいままにして王を毒殺せんとはかったのである。⑤参加者は「一族党羽」の人々である。⑥解明端緒と結末は資謙の姻戚の拓俊京等により囚えられ靈光に流された。「一族党羽」の人々は除かれ、資謙はまもなく配所で死んだのである。

謀叛顥末寸評は二代の王に姉妹を納れ、戚臣を利用して王を毒殺せんとはかった人物である。また、門蔭を利用して進んだ人物でもある。謀叛の内容を知る記述が欠如しているといえよう。

(8) 拓俊京（?～1144）（仁宗22）

拓俊京は第17代王仁宗時代の武臣である。黄海道谷山拓氏の始祖である。「家貧にして学問する能わず」、東女真と戦って戦功を立て閤門祇候を拝した人物である。仁宗4年「李資謙と與に兵を挙げて闕を犯」したが、王側についた。明年犯闕の罪を劾奏されて、配島され、また明年故郷の谷州に量移（恩赦で任地に移されること）せられた人物である。「叛逆伝」によってその謀叛顥末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ、次のようである⁽¹⁴⁾。

(史料8)

谷州（黄海道）の人。家貧にして學問する能わず。無頼の輩と遊び、胥吏と爲らんことを求め得ず。肅宗雞林公たりし時、其の府に入りて従者と爲る。遂に樞密院

別駕に補せらる。肅宗九年平章事林幹に従いて、東女眞を伐ち奮戦して功有り。千牛衛録事叅軍事を授けらる。睿宗二年中軍兵馬録事を以て尹瓘^{いんかん}に従いて復た東女眞を伐ち、石城英州に戦いて大捷し、閤門祗候を拜す。又吉州に戦いて功有り。事聞(王に申しあげる)して工部員外郎を授けられ、衛尉卿直門下省に累遷す。仁宗の初、吏部尚書叅知政事より開府儀同三司檢校司徒守司空書侍郎平章事を拜し、未だ幾ならず、自ら其の郷谷州に還る。王使を遣り追て牛峯郡に及び、之を諭して召し還し、門下侍郎平章事と爲す。四年二月李資謙と與に兵を擧げて闕を犯す。王諭すに力を王室に效すを以てす。時に俊京資謙と隙^{あらそい}有り。五月資謙を執えて流に處す。功を以て門下侍中を拜す。俊京次を越ゆる(順序を飛び越す)を以て受けず。乃ち推忠靖國協謀同德衛社功臣三重大匡開府儀同三司檢校太師太保門下侍郎同中書門下平章事判戸部事兼西京留守使上柱國に拜す。俊京功を待みて跋扈^{たのばつこ}(横暴)し、王密に之を忌む。明年左正言鄭知常に其の犯闕の罪を劾奏せられ、巖墮島(全羅道羅州牧山川条、俗称巖泰『勝覽』35卷参照)に流され、又明年谷州に量移せらる。二十二年王詔して曰く、拓俊京の罪爲臣の節を失うといえども、亦衛社の效有り。朝奉大夫檢校戸部尚書を授くべしと。數旬疽背^{かさ}に發して死す。

武臣拓俊京について①叛逆時の王名と年代は仁宗4年(1126年)李資謙とともに挙兵したが王の説得により王側についた。②出自と官職は家が貧しく学問が出来ず、東女眞と戦って戦功を立て閤門祗候を拜した人物である。③王朝の待遇は戦功により高い官職を与えられて優遇されていた。④動機は李資謙とともに挙兵したが王側につくように説得されている。⑤参加者は李資謙とともに挙兵して闕を犯している。⑥解明端緒と結末は拓俊京の王側への寝返りにより、また、左正言鄭知常に犯闕の罪を劾奏されて配島となっている。結末は「數旬疽^{かさ}背(悪性のはれもの)背に発して死」んでいる。

謀叛顛末寸評は武臣拓俊京は李資謙との共謀罪で劾奏され配島されている。王側に寝返ったが結局は「犯闕の罪」でさばかれていた人物といえよう。謀叛の内容を知る記述が欠如して勝者の理論で書かれているといえよう。

(9) 妙清(?~1135)(仁宗13)

妙清^{みょうせい}は第17代王仁宗時代の僧侶・叛逆者である。西京の反乱の首謀者である。陰陽地理の秘術に通じ、仁宗に取り入り西京(平壤)に遷都すれば国家は栄えると奏上した。一方、金富軾は反対した。妙清は仁宗13年(1135)西京で反乱を起こしたので仁宗は平章事(中書省・門下省正2品)金富軾を元帥と為し討伐を命じた。「叛逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略、次のようである⁽¹⁵⁾。

(史料9)

西京の妖僧なり。後ち名を淨心と改む。高麗仁宗六年日者^{につしや}(日の吉凶うらない師)白壽翰、檢校少監を以て西京に分司し、妙清を謂いて師と爲し、二人陰陽秘術

に託して以て衆を惑わす。鄭知常も亦西京の人、深く其の説を信じ、以爲らく上京基業、已に衰へ宮闕焼盡して餘無し。西京は王氣有り、宜しく移御（王の他所に移られること）して上京と爲すべしと。乃ち近臣内侍郎中金安と謀て曰く、吾等若し主上を奉じ西都に移御して上京と爲さば、當に中興功臣たるべし。獨り一身を富貴にするのみならず、亦子孫無窮の福なりと。遂に口を騰^あげて之を譽め、近臣洪彝^い・李仲孚^ふ及び大臣文公仁・林景清等從て之に和し、遂に奏す。妙清は聖人なり、白壽翰も亦其の次なり。國家の事、いちいち咨問して後ち行い、其の陳請する所容受せざる無ければ則ち政成り事遂^がげて國家保つべきなりと。乃ち諸官に署名せんことを歷請す。平章事金富軾・叅知政事任元敦・承宣李之氏獨り署せず。王持疑すといえども衆口力言を以て信ぜざるを得ず。是において妙清等上言す。臣等西京林原驛の地を觀るに、是れ陰陽家の所謂の大華の勢、若し宮闕を立て、之に御せば、則ち天下を并すべく、金國贄（にえ・礼物）を執りて自ら降り、三十六國皆臣^{しやう}妾（臣從）と爲らんと。王遂に西京に幸し、從行の宰樞に命じ、妙清、壽翰と與に林原驛（平安南道大同郡釜山面新宮洞）の地を相せしめ、金安に命じて宮闕を營ましめ、役を督すること甚だ急なり。時沍寒（氷がこおりついて寒い）に方り、民甚だ怨咨^しす。翰林學士金富轍上書して不可を極言せしが、王從わず。七年新宮成り、王又西京に幸す。妙清の徒或は上表して王に勸め、帝を稱して建元せしめ、或は劉齊に約して金を挾攻して之を滅ぼさんと請う。識者皆以て不可と爲す。妙清の徒喋^{ちやうちやう}々（口数多くしゃべる）已まず。王終に聽かず。明年西京重興寺塔災す。或るひと妙清に問いて曰く、師の西京を請うは災を鎮むる爲なり、何故に此の大災有るやと。妙清慙赧^{ざんたん}（はじて赤面する）答うる能わず。俛首^{ふしゆ}（首をたれる）良久（しばらくたつて）して曰く、上若し上京に在らば則ち災變此より大なるもの有らん、今此に幸す、故に災外に發して、而して聖躬（聖体）安妥（安らか）なりと。妙清を信ずる者は曰く是の如くなれば豈に信ぜざるべけんやと。九年妙清又王に説き林原宮城を築き八聖堂を宮中に置く。（中略）皆像を繪いて安ず。十年始めて上京の宮闕を修し、平章事崔弘宰及び公仁・景清をして其の役を董^{ただ}せしむ。李資謙の亂に宮闕灰燼する。是に至りて始めて命じて營修せしむ。基を開くに及び、妙清・弘宰等及び勾當^{こうとう}（任務にあたる）役事員吏をして皆公服して序立（順々にならびたつ）せしめ、將軍四人擯甲拔劍して四方に立ち、卒百二十人、槍三百人、炬二十人燭して環立し、妙清中に在りて白麻繩四條長さ三百六十歩を以て四引して法を作す。自ら言う此れ太一玉帳歩法なり、禪師道詵之を康靖和に傳え靖和之を我に傳う、老に臨み白壽翰を得て之を傳う、衆人の知る所に非るなりと。妙清・壽翰又奏す。上京は地勢衰う、故に天災孽^{げつ}を降し、宮闕焚蕩す。須らく數々西京に御し、災を禳^{はら}い禱を集め、以て無窮の業を享くべしと。日官皆以て不可と爲す。知常・安及び大臣等曰く、妙清の言う所は即ち聖人の法なり、違うべからざるなりと。乃ち妙清を以て隨

駕福田（福德をもたらす下地）と爲し壽翰を内侍に入れ西宮に幸す。行いて金岩驛（平山の南方）に至る。風雨暴^{にわか}に作り、昼忽ち晦冥^{おこ}（くらやみ）し、衛士顛沛^{たちま}（うろたえる）し、王轡^{かいめい}を執りて路に迷い、或は泥に陥り或は石に觸る。侍従王之く所を失ひ、宮人號泣す。晩に及んで雪を降し、寒甚しく人馬駝駝死する者多し。妙清の曰く、我既に是の日風雨有るを知り、雨師風伯に勅して、乘輿道に上らば風雨する勿らしむ。既に之を許し、而して食言（うそをつく）すること此の如し、憎むべきの甚しきなりと。西京の父老妙清知常の旨を希い、上表して帝を稱し元を建てんことを請う。知常等因て王に説て曰く、大同江瑞氣有り此れ神龍の吐涎（よだれ）、千歲^{とせん}罕^{まれ}に逢う所、請う上天心に應じ、下人望に順い、以て金國を壓せんと。王以て承宣李之氏に問う。對て曰く金國は強敵輕ろんずべからざるなり、況んや兩府大臣上都に留守す、一兩人の言を偏聽し以て大義を決すべからざるなりと。王乃ち止む。妙清・壽翰密に大餅を作り、其の中を空にし、一孔を穿ち熟油を盛りて大同江に沈む、油漸く出でて水面に浮び、之を望めば五色の如し。因て言て曰く、神龍涎^{よだれ}を吐いて五色の雲と爲る、此れ嘉瑞なり、請う百官をして表賀せしめんと。王人を遣りて之を審視せしめ、^{しゅうしや}凶者（およぐもの）をして索らしめて大餅を得、因て其の詐を知る。任元凱上書して言う、妙清・白壽翰等其の姦謀を^{ほしいまま}肆にし、怪誕の説を以て衆心を誑惑し、一二大臣及び近侍の人、深く其の言を信じ、上天聽を惑わす。臣將に不測の變有らんを恐る、請う妙清等を市に戮^{ころ}し以て禍萌を絶たんと。報ぜず。十一年直門省事李仲・侍御史文公祐等亦上疏して之を斥遠（しりぞけ遠ざける）せんことを請う。報ぜず。十二年王妙清を以て三重大統知漏刻院事と爲す。其の黨固く西巡を請い逆謀^なを濟さんと欲す。王大臣諫官の言を以て聽さず。十三年妙清遂に分司侍郎趙匡・兵部尚書柳岳・司宰少卿趙昌言・安仲榮等と西京に據て反し、兵を遣りて^{きつ}崑嶺の道を斷ち、國を大爲と號し、天開と建元し、自ら天遣忠義軍と稱し、道を分ちて直に上京に趨かんとす。此において王金富軾を以て元帥と爲し三軍を率^{むか}いて往いて之を討滅せしむ。事は富軾の傳に詳なり。

妖僧妙清について①叛逆時の王名と年代は西京で第17代王仁宗13年（1135）に分司侍郎趙匡・兵部尚書柳岳・司宰少卿趙昌言・安仲榮等と謀叛し「国を大爲と号し、天開と建元し、自ら天遣忠義軍と号」した。②出自と官職は不明である。「陰陽の秘術に托して、衆人を眩惑」してきた人物である。③王朝の待遇は西京遷都運動とともに仁宗に取り入り、7年に新宮が完成し「王又西京に行幸」された。反対に、妙清排斥派の巨頭金富軾は反対した。④動機は鄭知常が言うように「上京（首都開城）は基業已に衰え（1126年李資謙の乱で）、宮闕焼尽して余すなし。西京は王氣あり。宜しく移御して上京と爲すべし」とする西京遷都の理由であったのか不明である。反対派に対抗するための軍事行動であったのかとも考えられる。⑤参加者は豪族の一部や民衆までおり、元帥金富軾は「三軍」をひきいて討滅にあたっている。「妙清等の党を擒殺すること一千二

表 I 「叛逆伝」(一)立伝人物叛逆関係一覧

	人名	叛逆時の 王名と年代	出自と官職	王朝の待遇	動機	参加者	解明端緒と結末
1	桓宣吉 (?~918)	太祖元年 (918年)	馬軍將軍・武臣翊 戴の功	太祖腹心 精鋭を率い 宿衛	政柄(権) 人に在り	党五十余人	馬軍將のト智謙 密告 衛士に追殺され る
2	伊昕巖 (?~918)	太祖即位年頃 (918年頃)	「弓馬を業とし、 他の才識無し」 馬軍大將軍・武臣	弓裔に任用	太祖即位を 聞き、禍心 を懷く	徒党(人数 不明)	守義刑臺令閻萇 の上奏 棄市(死刑)
3	王規 (?~945)	第2代王 惠宗2年 (945年)	太祖に仕えた豪 族・文臣大匡(宰相)	二妃を入れ る 第十六妃一 子生む 「広州院 君」	「広州院 君」を立て んと謀る 失敗	党三百余人 誅す	斬殺
4	金致陽 (?~1009)	第7代王 穆宗12年 (1009年)	権臣 黄海道出身 第7代穆宗の母獻 哀王后皇甫氏の外 族 閤門通事舍人	「勢中外を 傾く」	「太后致陽 の子を生 み、相謀り 王の後を嗣 がしめんと す」	七人を誅 し、三十余 人を海島に 流す 王及び太后 を忠州に放 送	嬖臣劉忠正の変 告上書
5	康兆 (?~1010)	第8代王 顯宗元年 (1010年)	出身不明 武臣 中枢院使 右散騎常侍 西北面都巡檢使 中台使 吏部尚書參知政事	優遇	契丹聖宗王 から「弑君 大逆の罪」 を問われる	政変に王室 の人々 兵士多数	契丹聖宗王から 「弑君大逆の罪」 を問われる 契丹に誅殺
6	李資義 (?~1095)	第14代王 獻宗元年 (1095年)	文臣 中書令子淵の孫 侍中頤の子 戸部尚書 中枢院使	第13代王宣 宗資義の妹 元信宮主を 納れる 漢山侯昀を 生む 優遇	第14代王獻 宗幼弱で拳 兵	十七人捕殺 し五十余人 流配 賊党妻子奴婢 とす	第15代王肅宗が 「鷄林公の時」密 に知る 將士高義和に斬 らしめる
7	李資謙 (?~1126)	第17代王 仁宗4年 (1126年)	威臣門蔭で進む 「慶源伯願の子」 閤門祇候	2代の王に 姉妹数女を 納れる 「にわかに 貴くなる」	王の威臣国 事ほしいま まにし、王 を毒殺せんと す	一族党羽の 人々	資謙の姻戚拓俊 京等に囚へらる 配所で死す
8	拓俊京 (?~1144)	第17代王 仁宗4年 (1126年)	武臣 第17代王仁宗 黄海道谷山拓氏の 始祖 「家貧しく学問出 来ず」 戦功により閤門祇 候を拜す	戦功により 高い官職を 与えられる 優遇	李資謙と兵 を挙げて宮 闕を犯す 王の説得に より王側に 寝返る	李資謙と拳 兵	左正言鄭知常に 罪を劾奏され配 島 故郷谷州に量移 「数旬疽背に発し て死す」
9	妙清 (?~1135)	第17代王 仁宗13年 (1135年)	僧侶・叛逆者 西京の乱の首謀者 陰陽の秘術で衆人 眩惑	第17代王仁 宗に取り入 る 西京遷都運 動 妙清排斥派 金富弼反対	西京遷都か 反対派に対 抗する軍事 行動か不明	豪族の一部 や衆人 「党一千二 百余人擒 殺」	西軍の趙匡妙清 等の首を斬り罪 を朝廷に請願不 許可 再度叛逆 兵糧攻めで自 殺・自滅

百余人」と云われる。⑥解明端緒と結末は西軍の趙匡は「妙清・柳岳及び岳の子浩等三人の首を斬り」罪を朝廷に請願したが、許されなかった。復た叛逆したが、兵糧攻めにあい自殺して、反乱軍は1136年2月に自滅してしまった。14月間の反乱であった。謀叛顛末寸評は仁宗王を基軸に妙清の反乱は西京遷都運動と妙清排斥派の巨頭金富軾一派との対立である。妙清の乱は「事大精神（金富軾）が民族精神（妙清）を圧倒するに至った」とみる見方もある。事大主義者の「保守性と反動性」が指摘出来よう。

以上、列伝第四十「叛逆」(一)に見える立伝人物9名について、①叛逆時の王名と年代②出自と官職、③王朝の待遇、④動機、⑤参加者、⑥解明端緒と結末等について分析検討し最後に謀叛顛末寸評を加え、各人物の特色について9名の分析結果をまとめることにする。

(ii) 「叛逆」(一)の人物分析

「叛逆伝」(一)に見える人物分析をした①叛逆時の王名と年代から⑥の解明端緒と結末までをまとめた一覧表は表Iの通りである。①叛逆時の王名と年代では太祖代が2例、第2代恵宗代、第7代穆宗、第8代顕宗、第14代獻宗代が各1例の4例、第17代仁宗代が3例と合計9例がある。②出自と官職では伊昕巖が「弓馬を業とし、他の才識無し」であり、拓俊京は「家貧しく学問出来ず」戦功により閤門祇候を拝している。他は武臣馬軍將軍、武臣馬軍大將軍、大匡（宰相）、権臣では第7代穆宗の母獻哀王后皇甫氏の外族のため閤門通事舍人となっている。出身不明の武臣、戚臣で門蔭で進み、閤門祇候を拝した人物もいる。僧侶で西京の乱の首謀者もいる。武臣4名。文臣2名、権臣、戚臣、僧侶が各1名の合計9名の叛逆者がいる。武臣4名が叛逆者にいるのが特色であり、戚臣、僧侶等が各1名いる。文臣は2名である。③王朝の待遇はおおむね優遇されていた。④動機は王位継承関係が2例ある。其の他はいろいろな動機となっている。⑤参加者は徒党から一族までおり「党一千二百余人擒殺」が最も多い例である。⑥解明端緒と結末はほとんどが斬殺刑である。共謀罪の適用で連座されている。配所、量移所で死去した例や兵糧攻めで自殺自滅した例等がある。「叛逆伝」(一)以下の人物分析をふまえて全体の結びとしたいと考えている。

小 結 論

「叛逆伝」(一)では9例中太祖代が2例、第2代恵宗、第7代穆宗、第8代顕宗、第14代獻宗代が各1例で合計4例、第17代仁宗代が3例となっている。高麗王朝区分では四期区分されるが、Ⅰ期羅末・後三国から5代景宗王代（976～981年）までの豪族の時代、Ⅱ期6代成宗代（982～997年）から17代仁宗王代（1123～1146年）の李資謙及び妙清の乱頃までの門閥貴族の社会時代が「叛逆伝」(一)にみられる9例の時代である。豪族時代から門閥貴族社会への移行期に叛逆がみられ、Ⅰ期までは3例、Ⅱ期は6例で仁宗代がその内特に、3例みられる。表I「叛逆伝」(一)立伝人物叛逆関係一覧で示した

ように、叛逆の動機は1 桓宣吉は「政柄（権）人に在り」。2 伊昕巖は太祖即位を聞き、「禍心を懷く」。3 王規は「広州院君」を立てんと謀り失敗。4 金致陽は「太后致陽の子を生み、相謀り王の後を嗣がしめんとす」。5 康兆は契丹聖宗王から「弑君大逆の罪」を問われる。6 李資義は第14代王獻宗幼弱で挙兵。7 李資謙は王の戚臣。「国事ほしいままにし、王を毒殺せんとす」。8 拓俊京は李資謙と兵を挙げ宮闕を犯す。王の説得により王側に寝返る。9 妙清は西京遷都か反対派に対抗する軍事行動か不明である等によっている。まさに当時の社会の矛盾構造がみられる「叛逆」事例である。

中国古代法の「唐律」にみえる十惡の名称順は、「一謀反、二謀大逆、三謀叛」である⁽¹⁶⁾。「高麗律」においても叛逆者は死刑執行されている⁽¹⁷⁾。反逆縁坐罪は男子80歳婦人60歳以上等の者が免ぜられている⁽¹⁸⁾。

叛逆者は「叛逆伝」(一)の序文に見られる著作理由によれば「一族は全滅させられ、その祭祀は絶えるようになる」とあり「後世に生きている者は警戒せねばならない」としている。中国の「正史」では、世の乱臣・賊子は自分の非を恥じて恐れるようになったのは、孔子が『春秋』を作って「春秋の筆法」で書いたからである。勸善懲惡を目的として逆臣伝を著わしたとしていたことが判明した。

「叛逆伝」(二)以下に見える立伝人物の分析を通して「叛逆の特長」と「社会の矛盾構造」について解明したいと思う。今後の検討課題としたい。

註

- (1) 武田幸男編訳『高麗史日本伝』(L)岩波文庫、2005年、23～24頁参照。
- (2) 姜声媛著〈「高麗史」叛逆伝の分析〉「精神文化研究」13-1、1990、韓国精神文化研究院刊、147頁参照。
- (3) 列伝149上叛臣上の賛（参考資料）
 - (イ) 賛曰：懷恩與賊百戰，闔宗死事至四十六人，遂汎掃蕪，趙無餘埃，功高威重，不能防患，凶德根于心，弗得其所輒發，果於犯上，惜哉！其母拔刀逐賊，烈婦人也。懷光提萬衆，振天子於難，一爲讒人所沮，忿戾不自還，身首殊分，然讒人亦可疾矣，所謂「交亂四國」者也。
 - (ロ) 賛曰：語曰「出入之吝，謂之有司」。賤之也。德宗平朱泚，京師府藏耗竭，諸道始有進奉助經費，而詔書亦往往宣索於天下。以人主規規財利，下行有司之事，天下無事，賦取猶不息。劔南，江西有日月之進，杜亞，劉贊，王緯及錡歲時進奉，以固其寵，號稱「賦外羨餘」。又亦託中旨，以盜庫物。然獻纔十二三，餘皆私之。江，淮以南，物力大屈，人人樵忘生。貞元以後，中官市物都下，謂之「宮市」，不持符牒，口含詔命，取濫縑惡布紅紫之，倍其估，裂以償直。市之良賈精貨，皆逃去不出，列廬閉者，惟粗雜苦窳而已。亦有彊驅入禁中，罄所車輦，賣者不平，因共歐笞之。蒼頭女奴，名馬工車，惴惴常畏捕取。而德宗蔽於左右前後，莫知也。故善貞因錡并論其事，卒不知錡顯鹽鐵之利，以養兵圖叛，曾不及庸有司之吝遠甚。

尚、(ロ)の参考資料は『論語』堯曰第二十が引用され「四惡」の条の結びの部分の一語である。「出納の吝（やぶさか）なる、之（これ）を有司と謂うと」（出し惜しみをするのが吝で

あって、それが有司・官僚というもので、君子のなすべきことではない。)以上四惡について述べ政治家の戒めとすべきである。官吏訓である。

列伝150上逆臣上の賛(参考資料)

賛曰：祿山，思明與夷奴餓俘，假天子恩幸，遂亂天下。彼能以臣反君，而其子亦能賊殺其父，事之好還，天道固然。然生民厄會，必假手于人者，故二賊暴興而亟滅。張謂譏劉裕「近希曹，馬，遠棄桓，文，禍徒及於兩朝，福未盈於三載，八葉傳其世嗣，六君不以壽終，天之報施，其明驗乎！」杜牧謂：「相工稱隋文帝當爲帝者，後篡竊果得之。周末，楊氏爲八柱國，公侯相襲久矣，一旦以男子偷竊位號，不三二十年，壯老嬰兒皆不得其死。彼知相法者，當曰此必爲楊氏之禍，乃可爲善相人。」張，杜確論，至今多稱誦之。如祿山，思明，希劉裕，楊堅而不至者，是以著其論。

列伝150下逆臣下の賛(参考資料)

賛曰：唐亡，諸盜皆生於大中之朝，太宗之遺德餘澤去民也久矣，而賢臣斥死，庸儒在位，厚賦深刑，天下愁苦。方是時也，天將去唐，諸盜並出，歷五姓，兵未嘗少解，至宋然後天下復安。漢之亡也，天下大亂，至晉然後稍定；晉之亡也，天下大亂，至唐然後復安。治少而亂多者，古今之勢，盛王業業以求治，可少忽哉！

(4) 列伝234叛臣上の序文

宋失其政，金人乘之，俘其人民，遷其寶器，效遼故事，立其臣爲君，冠履易位，莫甚斯時。高宋南渡，國勢弗振，悍僕狂奴，欺主衰敗，易動於惡。兵雖凶器，尤忌殘忍，將用忍人，先無仁心，視背君親猶反掌耳。世將之子使握重兵，居之阨塞之地，豈非召亂之道乎？大義昭明，旋踵殄滅，蓋天道也。扶綱常，遏亂略，作叛臣傳。

(5) 小林勝人訳注『孟子』(山岩波文庫，1972年，254～258頁参照)。

(6) 「微にして顯われ，志して晦く，婉にして章を成し，盡くして汙らず，惡を懲らしめて善を勸む。」(『春秋』の語法は，字かずは少いが意味は明らかであり，具に書いても露骨をさけ，婉曲に言いながらも筋みちはたち，直言して事実をまげず，惡を懲らしめ善を勧め。) 貝塚茂樹編，『春秋左氏伝』，世界古典文学全集，第13巻，筑摩書房，昭和45年刊，177頁参照。

(7) (史料1)

桓宣吉

桓宣吉，與其弟香寔，俱事太祖，有翊戴功，太祖，拜宣吉，馬軍將軍，委以腹心，常令率精銳宿衛，其妻謂曰，子，才力過人，士卒服從，又有大功，而政柄在人，可不懷乎，宣吉，心然之，遂陰結兵士，欲伺隙爲變，馬軍將卜智謙，知之，密告太祖，以跡未形，不納，一日，太祖，坐殿，與學士數人，商略國政，宣吉，與其徒五十餘人，持兵，自東廂，突入內庭，直欲犯之，太祖，策杖立厲聲叱之曰，朕，雖以汝輩之力至此，豈非天乎，天命已定，汝敢爾耶，宣吉，見太祖辭色自若，疑有伏甲，與衆走出，衛士，追及毬庭，盡擒殺之，香寔，後至，知事敗，亦亡，追兵殺之，又徇軍吏林春吉者，青州人，與州人，裴忿規，季川人康吉・阿次・昧谷人景琮，謀反，欲逃歸青州，智謙，以聞，太祖，使人執訊之，皆服，並令禁錮，唯忿規，知謀洩，乃逃，於是，欲盡誅其黨，青州人玄律景，景琮姊，乃昧谷城主龔直妻也，其城甚固，難以攻拔，且隣賊境，若或誅琮，龔直必反，不如宥以懷之，太祖，欲從之，馬軍大將軍廉湘進曰，臣聞，景琮嘗語馬軍箕達曰，姊之幼子，今在京師，思其離散，不堪傷情，況觀時事，亂靡有定，會當伺隙，與之逃歸，琮謀今果驗矣，太祖，大悟，便令誅之。

(8) (史料2)

伊昕嚴

伊昕嚴，業弓馬，無他才識，見利躁求，事弓裔，以鉤距得見任用，弓裔末年，將兵襲取熊州，因鎮之，聞太祖即位，潛懷禍心，不召自至，士卒多亡，熊州復爲百濟所有，韓榮守義刑臺令閭閻長，與昕嚴比隣，甚，知其陰謀，具奏，太祖曰，昕嚴棄鎮自來，以喪邊疆，罪實難原，然與我並肩事主，情分有素，不忍加誅，且其反形未露，彼必有辭，甚，請密令伺之，太祖，遣內人至甚家，從帳中候之，昕嚴妻桓氏，至廁謂其無人，旋已長吁曰，吾夫事若不諧，吾受禍矣，言訖而入，內人以狀聞，遂下獄，具服，令百僚議其罪，皆曰當誅，太祖，親讓之曰，汝素蓄兇心，自陷刑辟，法者，天下之公，不可私攘，昕嚴，流涕而已，令斬於市，籍其家，不問黨與。

(9) (史料3)

王規

王規，廣州人，事太祖，爲大匡，太祖，納規二女，一爲第十五妃，一爲第十六妃，十六妃，生一子，曰廣州院君，惠宗二年，規，譖王弟堯及昭有異圖，惠宗，知其誣，恩遇愈厚，司天供奉崔知夢奏，流星犯紫微，國必有賊，惠宗，意規謀害堯昭之應，乃以長公主妻昭，用強其族，規，不得行其謀，規，又欲立廣州院君，嘗夜伺王睡熟，遣其黨，潛入臥內，將行大逆，惠宗，覺之，一舉斃之，令左右曳出，不復問，一日，惠宗，遑豫，在神德殿，知夢又奏，近將有變，宜以時移御，惠宗，潛徙重光殿，規，夜率其黨，穴壁而入，寢已空矣，規，見知夢，拔劍罵之曰，上之移寢，必汝謀也，知夢，竟無言，規，乃退，惠宗，雖知規所爲，亦不罪之，規，嘗惡大匡朴述熙，及惠宗薨，矯定宗命，殺之，初惠宗，疾篤，定宗，知規有異志，密與西京大匡式廉，謀應變，及規將作亂，式廉，引兵入衛，規，不敢動，乃竄于甲申，遣人追斬之，誅其黨三百餘人。

(10) (史料4)

金致陽

金致陽，洞州人，千秋太后皇甫氏外族，性姦巧，陰能關輪，嘗詐祝髮，出入千秋宮，頗有醜聲，成宗，認之，杖配遠地，穆宗，即位，召授閣門通事舍人，不數年，貴寵無比，驟遷至右僕射，兼三司事，百官與奪，皆出其手，親黨布列，勢傾中外，賄賂公行，起第至三百餘間，臺謝園地，窮極美麗，日夜與太后遊戲，無所忌，又役農民，立祠洞州，額曰星宿寺，又於宮城西北隅，立十王寺，其圖像奇怪難狀，潛懷異志，以求陰助，凡器皿，皆銘其意，鍾銘曰，當生東國之時，同修善種，後往西方之日，共證菩提，穆宗，常欲黜之，恐傷母志，不敢也，後太后，生子，是私致陽所生也，致陽與太后，謀爲王，後忌大良君，逼令爲僧，屢欲害之，乘王寢疾，欲謀變，劉忠正，上書告變，王，召蔡忠順密議，令亟迎大良君，致陽，知之，無如之何，首鼠數日，及康兆廢立，遣兵殺致陽并其兒，流其黨于海島，有長淵縣人文仁渭者，惴惴無華，久爲千秋宮使，及致陽誅，宮僚多連坐誅竄，獨仁渭，以兆之庇，獲免，官至尙書左僕射。

(11) (史料5)

康兆

康兆，穆宗時，累官中樞使右常侍，出爲西北面都巡檢使，穆宗，寢疾，知金致陽謀變，遣皇甫翕義，往迎顯宗，又知殿中監李周楨，附致陽，權授西北面都巡檢副使，即日發遣，仍徵兆入衛，兆，聞命，行至洞州龍川驛，內史主書魏從正・安北都護掌書記崔昌會，坐事被黜，深怨朝廷，常欲構亂，二人俱謁兆給言，主上疾篤，命在頃刻，太后與致陽，謀奪社稷，以公在外，手握重兵，恐或不從，矯命徵召，足下，當速還本道，大舉義兵，保國全身，時不可失，兆，深然之，以爲王已薨，朝廷悉被致陽詿誤，便歸本營，太后忌兆來，遣內臣，守崑嶺，使過行人，兆父，患之，爲書納竹杖中，令奴剃髮爲僧，詭言妙香山僧，報兆云，王已賓天，姦兇用事，可舉兵來，以靖國難，奴，晝夜急走，至兆

處，氣竭而斃，兆，探得杖書，愈信王薨，遂與副使吏部侍郎李鉉雲等，領甲卒五千，至平州，知王未薨，兆喪氣，垂頭良久，諸將曰，業已來矣，不可止，兆曰然，遂決意廢立，不知王已迎顯宗，乃遣分司監察金應仁，率兵往迎，先奏王曰，上疾彌留，國本未定，姦黨窺覷，又偏信庾行簡等讒諛，賞罰不明，致此危亂，今欲定分以係人心，除惡以快衆憤，已迎大良君詣闕，恐聖情驚動，請出御龍興歸法寺，即掃盪姦黨，然後迎人，王曰，已知所奏，是日，應仁與俞義，到神穴寺，奉顯宗還，翼日，鉉雲，率兵入迎秋門大譟，穆宗，驚懼，訊行簡送兆所，給事中卓思政·郎中河拱辰，皆奔于兆，兆，至大初門，據胡床，崔沆，出自省，兆，起揖，沆曰，古有如此事乎，兆，不應，於是，兵士闖入，穆宗，知不免，與太后，仰天號泣，率宮人小堅及蔡忠順·劉忠正等，出御法王寺，兆，坐乾德殿御榻下，軍士呼萬歲，兆，驚起跪曰，嗣君未至，是何聲耶，俄而俞義等，奉顯宗而至，遂即位於延寵殿，兆，廢穆宗爲讓國公，使閤門通事舍人傳巖等，守之，遣兵殺致陽父子及行簡等七人，流其黨及太后親屬周禎等三十餘人于海島，穆宗，使沆請馬於兆，送一匹，又於人家，取一匹，穆宗及太后，乘之，出自宣仁門，向忠州，行至積城縣，兆，遣尙藥直長金光甫進毒，穆宗，不肯飲，光甫，謂隋從中禁安霸等曰，兆言，若不能進毒，可令中禁軍士行大事，報以自刃，不爾，吾與若等，俱族矣，夜霸等，弑之，以自刎，聞，取門扇爲棺，權厝于館，兆，使人以縣倉米作飯祭之，顯宗，以兆爲中臺使，鉉雲，爲副使，尋授兆，吏部尙書叅知政事。元年五月，契丹主，以兆弑君，欲發兵問罪，王，聞之，以兆，爲行營都統使，鉉雲及兵部侍郎張延祐，副之，起居舍人郭元·侍御史尹微古·都官員外郎盧戢，爲判官，右拾遺乘里仁·西京掌書記崔冲，並爲修製官，檢校尙書右僕射上將軍安紹光，爲行營都兵馬使，御史中丞盧頴，副之，兵部郎中金爵賢及皇甫俞義，爲判官，少府監崔賢敏，爲左軍兵馬使，少府少監崔輔成，副之，興威衛錄事高幹，大樂丞金在銘，爲判官，刑部侍郎李昉，爲右軍兵馬使，刑部郎中金丁夢，副之，內謁者柳莊，爲判官，禮賓卿朴忠淑，爲中軍兵馬使，禮賓少卿李良弼，副之，尙書都事高延慶·司宰簿庾伯符，爲判官，刑部尙書崔士威，爲統軍使，戶部侍郎宋隣，副之，左司員外郎皇甫申·試兵部員外郎元穎，爲判官，率兵三十萬軍于通州，以備之，十一月，契丹主，自將步騎四十萬，號義軍天兵，渡鴨綠江，圍興化鎮，兆，引兵出通州城南，分軍爲三，隔水而陣，一營于州西，據三水之會，兆，居其中，一營于近州之山，一附城而營，兆，以劔車排陣，契丹兵入，則劔車合攻之，無不摧靡，契丹兵，屢却，兆，遂有輕敵之心，與人彈碁，契丹先鋒耶律盆奴，率詳穩耶律敵魯，擊破三水砦，鎮主告契丹兵至，兆，不信曰，如口中之食，少則不可，宜使多入，再告曰，契丹兵已多入，兆，驚起曰，信乎，恍惚若見穆宗立于其後，叱之曰，汝奴休矣，天伐詎可逃耶，兆，即脫鎰牟長跪曰，死罪死罪，言未訖，契丹兵已至，縛兆，裹以氈，載之而去，鉉雲，亦被執，契丹主解兆縛問曰，汝爲我臣乎，對曰，我是高麗人，何更爲汝臣乎，再問，對如初，又剛而問，對亦如初，問鉉雲，對曰，兩眼已瞻新日月，一心何憶舊山川，兆怒，蹴鉉雲曰，汝是高麗人，何有此言，契丹，遂誅兆。

(12) (史料6)

李資義

李資義，中書令子淵之孫，侍中頴之子，宣宗朝，累遷戶部尙書，獻宗元年，拜中樞院使，初宣宗，納尙書李碩女爲后，生王，又納資義妹元信宮主，生漢山侯昀，王，幼弱有疾，不能聽決，母后，專國事，左右，依違其間，資義，貪冒貨財，集無賴勇士，以騎射爲事，常曰，主上有疾，朝夕難保，外邸有窺覷者，汝輩宜盡力奉漢山侯，勿令神器歸于他人，聚兵禁中，欲舉大事，時肅宗爲鷄林公，在明福宮，密知之，諭平章事邵臺輔曰，國家安危，繫宰相，今事急，公其圖之，臺輔，使上將軍王國髦，領兵入衛，國髦，先令

壯士高義和，斬資義於宣政門內，誅其黨閤門祇候張仲・中樞院堂後官崔忠伯等于宣政門外，分遣兵士，捕資義子注簿綽・興王寺大師智炤・將軍崇列・澤春・中郎將郭希・別將成甫・成國・校尉盧占・隊正裴信等十七人，皆殺之，流平章事李子威・少卿金義英・司天少監黃忠現・奉御黃榮・少監徐晃・侍御史王臺紹・祇候李資訓・錄事李景泌・崔淵・注簿金寵・王續・判官李滋・令金彪・司辰黃玩・殿前承旨廉正・將軍李甫・吳昌・郎將仇賢・良玠・別將安麟・珍奇・散員惟寵・崔幸・林自成・侯善・金錢・李玄孟・康希白・鄭貞佐等五十餘人于南裔，沒賊黨妻子，爲兩界州鎮奴婢，肅宗初，御史臺奏，賊臣李資義等，私畜米穀，數至鉅萬，是皆剝民所聚，請並沒官，從之。

(13) (史料 7)

李資謙

李資謙，中書令子淵之孫，慶源伯顯之子，以門蔭，進爲閤門祇候，女弟爲順宗妃，順宗薨，與宮奴通，資謙，坐免官，睿宗，納資謙第二女爲妃，由是，驟貴，至叅知政事尙書左僕射杜國，進開府儀同三司守司徒中書侍郎同中書門下平章事，尋加守大尉，賜翼聖功臣號，封其母金氏，通義國大夫人，妻崔氏，朝鮮國大夫人，同日，降三勅于其第，累加同德推誠佐理功臣郡城郡開國伯，食邑二千三百戶，食實封三百戶，諸子並進爵，王薨，太子幼，諸弟頗覬覦，資謙，奉太子卽位，是爲仁宗，拜資謙，協謀安社功臣，守太師中書令郡城侯，食邑五千戶，食實封七百戶，下詔，欲異其禮數，群臣，請書表不稱臣，宴會，不與百官庭賀，待制金富弼，以爲不可，從之，尋冊爲漢陽公，以母喪去位，母平章事廷俊之女，性貪吝，抑買市人財物，或全不與直，又縱奴婢橫暴，及死，市人相賀，王，遣樞密院使朴昇中，詔諭資謙曰，君之於臣不名者，蓋所以表明功德，優禮親賢，成王之於周公旦，章帝之於東平王，是也，歷代以爲故事，況公，先王之所付托，冲人之所尊親，任大責深，功崇德重，不可與群僚，同其稱謂，自今所降書詔，不稱名不稱卿，此雖異數，亦率舊章，仍趣釋服赴朝，賜衣帶・鞍馬・金銀・幣帛甚多，資謙，上表陳謝，請終制，王，又遣使，冊爲亮節翼命功臣，中書令領門下尙書都省事判吏兵部西京留守事朝鮮國公，食邑八千戶，食實封二千戶，府號崇德，置僚屬，宮曰懿親，崇德，本逆臣金致陽西宅號，後乃知之，妻封辰韓國大夫人，子之美，爲祕書監樞密院副使，公儀，尙書刑部侍郎，之彥，尙書工部郎中兼御史雜端，之甫，尙書戶部郎中知茶房事，之允，殿中內給事，之元，閤門祇候，子僧義莊，爲首座，王，出乾德殿門外，親傳詔書，百官，詣殿庭賀，次進資謙第賀，資謙，釋服上官，坐中書省，宰樞文武常叅以上，階上，七品以下，階下，綴行陳賀，是日，大雨雷電，市道水深一丈，資謙，恐他姓爲妃，權寵有所分，強請納第三女于王，王，不得已從之，是日，大風飛瓦拔木，後又納其第四女，又大風雨，王，既冊資謙，推恩赦二罪以下，其日，中外所獻，悉歸資謙第，命有司，脩葺資謙祖先所居開明宅，功既訖，改號重興宅，令資謙入處，遣叅知政事李壽同・知樞密院事許載，下詔賜衣・金帛・鞍馬・土田・奴婢，仍幸其第置酒，用家人禮，夜艾而還，以之美，試禮部尙書同知樞密院事，公儀，衛尉卿，諸子弟姻婭，拜官有差，資謙，私遣其府注簿蘇世清，入宋上表進土物，自稱知軍國事，資謙，權寵日盛，有不附己者，百計中傷，竄王弟帶方公備于京山府，流平章事韓安仁于海島，殺之，又流崔弘宰・文公美・李永・鄭克永等五十餘人・以其族屬，布列要職，賣官鬻爵，多樹黨與，自爲國公，禮數，視王太子，號其生日，仁壽節，內外賀謝稱箋，諸子，爭起第宅，連亙街陌，勢焰益熾，賄賂公行，四方饋遺輻湊，腐肉常數萬斤，強奪人土田，縱其僕隸，掠車馬，輸已物，小民，皆毀車賣牛馬，道路騷然，又欲知軍國事，請王幸其第，授策勒定時日，事雖未就，王，頗惡之，內侍金榮，安甫麟，常侍左右，揣知王意，乃與同知樞密智祿延，欲捕資謙，流遠地，召上將軍崔卓・吳卓・大將軍權秀・將軍高碩等，圖之，時之元妻父拓俊

京，與其弟俊臣，頗用事，卓等，素疾俊臣，自下位，擢爲兵部尚書，居已上故，許之，約既定，至初夜，率兵入宮，先殺俊臣及俊京子內侍純，祇候金鼎芬・錄事田其上・崔英等，投尸於宮城外，內直旗頭學文，踰城，因中郎將池顯，告資謙，資謙，罔知所爲，郎中王毅，又踰城奔告其詳，資謙，與俊京及之美等，相顧戰恐，召集宰樞百寮于其第，使之美往復議問，皆莫知所對，俊京曰，事急矣，不可坐待，乃與侍郎崔湜・祇候李候進・錄事尹翰等，率數十人，至朱雀門，不得入，使翰踰城，折鑰開關，入至神鳳門外，呼譟聲殷地，祿延・卓等，謂外兵大集，膽落皆不能出，資謙，使人火崔卓・吳卓・秀・碩等家，囚其妻子奴僕，平明，俊京，見俊臣輩屍，恐不免，與之甫・湜・候進・翰・金鼎黃・曹舜舉・文仲經等，召聚軍卒，授軍器庫兵仗，進圍昇平門，義莊，自玄化寺，率僧三百餘人，至宮城外，在宮內者無敢出，但持弓矢，分守子城門上，王，御神鳳門，張黃繖，俊京軍卒，望見羅拜，懼呼萬歲，王，使問汝輩何爲操兵而至，對曰，聞有賊入禁中，欲衛社耳，王曰，無之，朕，亦無恙，汝等可釋甲散去，遂緹下內帑銀幣，賜軍卒，令侍御史李仲・起居舍人胡宗旦，宣諭軍士，解甲投兵，俊京怒，拔劍逐仲等，令軍卒復擲甲執兵大呼，或有流矢及御前，以楯蔽之，義莊之徒，以斧斫神鳳門柱，有自樓上射斫之者，中其頭，即斃，資謙，使閤門祇候崔學鸞，都兵馬錄事邵億，至宮門奏曰，請出禁中作亂者，不爾，恐驚動禁中，言甚不遜，王，默然，俊京，遣億謂資謙曰，今日向晚，恐賊乘夜竊發，及其未發，焚宮門索擒何如，資謙，使之美問平章事李壽等，答曰，宮宇相比，延燒不可撲滅，甚不可也，俊京，不待報，取少府監黃灰木・將作監木槿，積東華門廊，火之，風焰煽熾，湏臾延及內寢，宮人，皆驚駭走匿，及晚，俊京・之甫，被甲上馬，率兵百餘人，至春德門，守門內侍李叔晨，開門納之，俊京，入左掖門前，禁衛別將李作・將軍宋幸忠，拔劍逐之，俊京，奔退，作，手闔門扉，俊京，使人守諸門，令曰，有自內出者，即殺之，夜王步至山呼亭，侍從皆散，惟近臣林景清等十餘人在，王，恐被害，作書請禪位於資謙，資謙，畏兩府議，未敢發言，壽，颺言於座曰，上，雖有詔，李公，豈敢如是，資謙意遂沮，涕泣還書曰，臣無二心，惟聖鑑諒之，有洪立功者，將軍劉漢卿下中郎將也，資謙，以漢卿入內，即以立功爲借將軍，帥兵聽俊京指揮，俊京，使立功領卒六十餘人，擔柴至都省南路，立功密語卒曰，我與若等，皆王臣也，而負薪燒宮，非臣子之義，遂釋擔，從宣義門竄，入見羅拜，王，驚問爾爲誰，立功，前自陳，王，甚悅，賜酒食，自是，宿衛不離，黎明，王，以火焰將逼，欲出，會資謙，遣承宣金珣，請出御南宮，王，步至景靈殿，命內侍白思清，奉祖宗眞，納諸內帝釋院智井中，乃出西華門，乘馬至延德宮，吳卓導前，俊京，使郎將張成，拔劍突入，執卓斬之，又殺左僕射洪灌，分遣人，執崔卓・秀・碩・作・甫麟・幸忠・大將軍尹成・韓景・將軍朴英・宋仁・史惟挺・吳挺臣・漢卿・郎將李儒・內侍崔箴・員外郎朴元實等，皆殺之，其餘軍士死者，不可勝計，內侍奉御王觀・大將軍尹先・郎將丁寵珍・別將張成好，從王在南宮，資謙，請出之再三，王，不得已從之，使人請勿殺，之甫，皆殺之，資謙，又與俊京議，亂作日直宿者，無貴賤，皆殺之，壽，執不可，乃止，將軍李祿千・金旦・金彥，逃免，後彥，自出，流南裔，是日，宮禁焚蕩，惟山呼・賞春・賞花三亭及內帝釋院廊廡數十間，僅存，百官，狼狽奔散，資謙，殺祿延及吳卓子子升・碩弟甫俊，流桀于遠地，沒祿延・桀妻子，爲奴婢，桀，後改安，資謙，請王幸重興宅西院，王，去仗衛從間道，及院門，大卿金義元・崔滋盛，以重興宅執事出迎，郎將池錫崇，散員權正均・隊正吳含，自山呼亭至南宮，不離左右，至是，錫崇等，扶王將入北門，資謙・俊京，欲殺之，使郎將李積善牽出，錫崇，手執御衣，疾呼請救，王，顧叱積善，蹴其胷，猶不釋，御衣，爲之裂，幞頭，亦觸楣而破，之美・之甫，在門望見，王，不下階，崔湜，獨出拜，罵積善曰，有聖旨，汝何敢爾，積善，遂釋之，錫崇等，尙恐懼不能出，時宦者趙寧，諂事資謙，王，

召湜・寧曰，錫崇等三人，至誠愛君，更無他心，爾等，爲我請勿令殺，俊京，從之，流遠地，王，升堂，資謙，與其妻，拍手拊地大哭曰，自皇后入宮，願生太子，及聖人誕生，祈天永命，無所不至，天地鬼神，鑒吾至誠，不圖今日，反信賊臣，欲害骨肉，王，差報無言，王，自居西院，左右皆資謙黨，國事不自聽斷，動止飲食，皆不自由，百寮，移寓帝近寺館，備員而已，資謙・俊京，威勢益熾，其所施爲，無敢誰何，贈俊臣，守司空，鼎芬・純，戶部員外郎，其上英，閣門祇候，厚賻之，從資謙之意也，又出資謙所惡者，內侍二十五人，自是，外家益橫，宰相朴昇中・許載以下，皆諂諛附托，威虐可畏，王，密與內醫崔思全謀，諭俊京，令效力王室，俊京，心然之，王，賜俊京詔曰，惟朕不明，致兇徒生事，使大臣憂勞，皆寡人之罪，是用省躬悔過，指天誓心，冀與臣民，惟新厥德，卿其更勵厥脩，無念既往，盡心夾輔，俾無後艱，會之彥奴，罵俊京奴曰，汝主射宁位，火宮禁，罪當死，汝亦當沒爲官奴，豈得辱我哉，俊京，聞之大怒，走詣資謙第，解衣免冠曰，吾罪大矣，當詣所司自辨，徑出不復顧，有人止之，乃歸臥其家，資謙，遣之美・公儀請和，俊京罵曰，前日之亂，皆爾等所爲也，何獨謂我罪當死乎，卒不與見，因宣言欲歸老吾鄉，王，聞之，遣知樞密院事金富侁，趣令視事，賜鞍馬，資謙，從王詣安和寺，百官，拜馬前，資謙，視之自若，未幾，王，移御延慶宮，資謙，寓居宮南，鑿北垣以通宮內，取軍器庫甲兵，藏之家，王，嘗獨往北垣，仰天慟哭，移時，資謙，因十八子之讖，欲圖不軌，置毒餅中以進，王妃，密白于王，以餅投鳥，鳥斃，又送毒藥，令妃進于王，妃，奉槐陽藥覆之，妃，即資謙第四女也，俊京，既與資謙構隙，思全，又乘間說之，俊京，乃決策附奏云，願自效，王，使謂俊京曰，國公，雖僭亂，反狀未著，朕，若先舉，親親之意謂何，徐俟其變，應之未晚，常使中人伺之，一日，俊京，在兵部，注擬武職，王，手書小紙，密遣宦者趙毅，示俊京曰，今日，崇德府軍將持兵至殿北，若將入寢門，朕，若遇害，實否德所致，所可痛者，太祖勛業，列聖相繼，以至寡躬，若爲異姓所易，非獨朕罪，實輔相大臣所深恥也，惟卿圖之，俊京，乃以御筆，示尙書金珣，珣，跪號天泣曰，有旨如此，義當死事，公其可安乎，俊京，與珣，率上衛將校七人・寮吏僕隸二十餘人，出北門，倉卒無所持，各取柵木爲棒，自金吾衛南橋入宮，毅延呼曰，事急矣，趣入，遂閉廣華門，李公壽，適至，王，命開一扉，納之，公壽，即壽也，巡檢都領鄭惟晃，率百餘人，入軍器監，分授兵甲，向延慶宮，路見資謙黨少卿柳元湜，其言不順，即殺之，俊京，擐甲冑，急入宮，王，出天福殿門遲之，俊京，奉王以出，資謙之黨，射之，俊京，拔劍一呼，無敢動者，王，入御軍器監，嚴兵衛，俊京，使承宣康侯顯，召資謙，資謙，服素而至，俊京與公壽議，囚資謙及妻子于八關寶，斬其將軍康好・高珍守等，皆資謙所指使者也，分遣人，逮捕支黨，王，出御廣華門，使告於衆曰，禍起蕭牆，大逆不道，賴忠臣義士，舉義除害，衆皆稱萬歲，懽呼拊躍，至有流涕者，之美，聞變，率百餘人，至廣華門，不得入，徘徊往返，與李資德及金仁揆，入兵部，猶未知資謙被囚，及晚，巡檢至兵部，執之美，囚檢點所，資德等，驚駭散去，王，還御延慶宮，近侍，先入清宮，義莊，匿內寢，執送八關寶，流資謙及妻崔氏・子之允于靈光，之美于陝州，公儀于珍島，之彥于巨濟，之甫于三陟，義莊于金州，之元于咸從・閣門祇候朴彪・文仲經・直長朴永・太史令梁麟・冬官正梁釋・李叔晨・李芬・大將軍金好・將軍池顯・池福臣・郎將崔思琰・別將位好・散員宋用中等三十餘人，及官私奴凡九十餘人，分配遠地，彪，最姦黠，諂媚資謙，常出入臥內，凡聚斂附益，皆其所爲故，射利干祿者，競賂之，遂致富貴，朝廷，尤疾之，中路殺之，沉于水，又執射神鳳門者一人，及之彥家臣大樂丞金仲，枷于市三日，流遠島，其親黨資德・仁揆・義元・王毅・禮賓卿李資元・殿中少監朴孝廉・祇候李存・皆貶爲守令，又流朴昇中于蔚珍，資謙，尋死于靈光，後三年，召還其妻，久之，下詔曰，昔鄭莊公，置姜氏于城潁，誓曰，不及黃

泉，無相見也，既而悔之，復爲母子如初，秦皇，迎遷母於雍而入咸陽，復居甘泉，此二君，忘母氏之舊惡，致人子之孝意，朕甚慕焉，今外舅雖沒，而親親之意，終不可忘，可贈檢校太師漢陽公妻崔氏，可封卞韓國大夫人。

(14) (史料 8)

拓俊京

拓俊京，谷州人，其先本州吏，家貧不能學問，與無賴輩遊，求爲胥吏不得，肅宗，爲雞林公，就其府爲從者，遂補樞密院別駕，肅宗九年，從平章事林幹，伐東女真，師敗，俊京，請兵器介馬於幹，入賊陣，斬其將一人，奪所俘二人，遂與校尉俊旻・德麟，各射殪一人，賊少却，俊京，將退，賊以百騎追之，又與大相仁占，射殺賊將二人，賊不敢前，我軍得入城，授千牛衛錄事參軍事，睿宗二年，以中軍兵馬錄事，從尹瓘伐東女真，戰于石城・英州，大捷，瓘，承制拜閣門祗候，又戰于吉州，有功，事聞，授工部員外郎，語在瓘傳，王，以俊京屢有戰功，召見其父檢校大將軍謂恭于內殿，從容勞問，賜酒食及銀一錠・米十碩，俊京，累遷衛尉卿直門下省，仁宗初，由吏部尚書參知政事，拜開府儀同三司檢校司徒守司空中書侍郎平章事，未幾，自歸其鄉谷州，王，遣侍郎崔湜・奉御李侯，追及於牛峯郡，諭之乃還，轉門下侍郎平章事，四年二月，與李資謙，舉兵犯關，王，諭以效力王室，會俊京，與資謙有隙，五月，執資謙流之，語在資謙傳，以功，拜門下侍中，俊京，辭以越次，不受，乃拜推忠靖國協謀同德衛社功臣，三重大匡開府儀同三司檢校太師守大保門下侍郎同中書門下平章事判戶部事兼西京留守使上柱國，妻黃氏，爲齊安郡大夫人，賜衣服・金銀器・布帛・鞍馬・奴婢一十口・田三十結，圖形壁上，明年，左正言鄭知常，以俊京既去資謙，恃功跋扈，且知王忌俊京，遂上疏曰，丙午春二月，俊京，與崔湜等犯關，上，御神鳳門樓諭旨，軍士，皆免甲權呼，獨俊京，不奉詔，脅軍前進，至有飛矢過黃屋者，又引軍突入掖門，焚宮禁，翼日，移御南宮，凡侍左右者，皆執而殺之，自古亂臣，罕有若此，誠天下之大惡也，五月之事，一時之功也，二月之事，萬世之罪也，陛下，雖有不忍人之心，豈以一時之功，掩萬世之罪乎，請下吏罪之，乃流巖墮島，又明年，量移谷州，八年，詔曰，俊京，犯關之罪雖重，然其功亦不細，令妻子完聚，給還其子職田，尋集三品以上及臺諫侍臣于都省，籍李拓之黨及子孫之罪，藏諸所司，二十二年，詔曰，拓俊京，雖失爲臣之節，亦有衛社之功，可授朝奉大夫檢校戶部尚書，數旬，疽發背，死于谷州。

(15) (史料 9)

妙清

妙清，西京僧，後改淨心，仁宗六年，日者白壽翰，以檢校少監，分司西京，謂妙清爲師，二人，托陰陽祕術以惑衆，鄭知常，亦西京人，深信其說，以爲上京基業已衰，宮闕燒盡無餘，西京有王氣，宜移御爲上京，乃與近臣內侍郎中金安謀曰，吾等，若奉主上，移御西都，爲上京，當爲中興功臣，非獨富貴一身，亦爲子孫無窮之福，遂騰口交譽，近臣洪彝弼・李仲孚大臣文公仁・林景清，從而和之，遂奏妙清聖人也，白壽翰亦其次也，國家之事，一一咨問而後行，其所陳請，無不容受，則政成事遂而國家可保也，乃歷請諸官署名，平章事金富弼・參知政事任元敦・承宣李之氏，獨不署，書奏，王，雖持疑，以衆口力言，不得不信，於是，妙清等上言，臣等，觀西京林原驛地，是陰陽家所謂大華勢，若立宮闕御之，則可并天下，金國，執贊自降，三十六國，皆爲臣妾，王，遂幸西京，命從行宰樞與妙清・壽翰，相林原驛地，命金安，營宮闕，督役甚急，時方寒沍，民甚怨咨，七年，新宮成，王，又幸西京，妙清之徒，或上表勸王，稱帝建元，或請約劉齊，挾攻金滅之，識者，皆以爲不可，妙清之徒，喋喋不已，王，終不聽，王，御新宮乾龍殿，受群臣賀，妙清・壽翰・知常等言，方上坐殿，聞空中有樂聲，此豈非御新闕之瑞

乎，遂草賀表，請幸樞署名，幸樞，不從曰，吾儕雖老，耳尙未聾，空中之樂，曾所未聞，人可欺，天不可欺也，知常忿曰，此非常嘉瑞，宜書青史，昭示後來，而大臣如此，深可嘆也，表，竟不得上，明年，西京重興寺塔災，或問妙清曰，師之請幸西都，爲鎮災也，何故，有此大災，妙清，慚赧不能答，俛首良久，抽拳舉額曰，上若在上京，則災變有大於此，今移幸於此故，災發於外，而聖躬安妥，信妙清者曰，如是，豈可不信也，又明年，金安奏，請以所奏天地人三庭事，宜狀傳示侍從官，書三本，一付省，一付臺，一付諸司，知制誥令各論奏，妙清又說王，林原宮城，置八聖堂于宮中，八聖，一曰，護國白頭嶽太白仙人實德文殊師利菩薩，二曰，龍團嶽六通尊者實德釋迦佛，三曰，月城嶽天仙實德大辨天神，四曰，駒麗平壤仙人實德燃燈佛，五曰，駒麗木覓仙人實德毗婆尸佛，六曰，松嶽震主居士實德金剛索菩薩，七曰，甌城嶽神人實德勒叉天王，八曰，頭嶽天女實德不動優婆夷，皆繪像安，仲孚・知常等，以爲此聖人之法，利國延基之術，安等又奏，請祭八聖，知常，撰其文曰，不疾而速，不行而至，是名得一之靈，卽無而有，卽實而虛，蓋謂本來之佛，惟天命可以制萬物，惟土德可以王四方，肆於平壤之中，卜此大華之勢，創開宮闕，祇若陰陽，妥八仙於其間，奉白頭而爲始，想耿光之如在，欲妙用之現前，恍矣至真，雖不可象靜，惟實德卽是如來，命繪事以莊嚴，叩玄闕而祈嚮，其飾誣說，如此，有武人崔達深，與知常密契，師事妙清，嘗上言，陛下，欲平治三韓，則舍西京三聖人，無與共之，卽指妙清・壽翰・知常也，十年，始修宮闕，平章事崔弘宰及公仁・景清，董其役，及開基，妙清，使弘宰等及勾當役事員吏，皆公服序立，將軍四人，甲而劍，立四方，卒百二十人，槍三百人，炬二十人，燭而環立，妙清在中，以白麻繩四條，長三百六十步，四引作法，自言此太一玉帳步法，禪師道說，傳之康靖和，靖和，傳之於我，臨老，得白壽翰，傳之，非衆人所知也，妙清・壽翰，又奏，上京地勢衰故，天降災孽，宮闕焚蕩，湏數御西京，禳災集禧，以享無窮之業，王，問諸日官，皆曰不可，知常・安及大臣等曰，妙清所言，卽聖人之法，不可違也，乃以妙清，爲隨駕福田，壽翰，入內侍，幸西京，行至金巖驛，風雨暴作，晝忽晦冥，衛士顛沛，王，執轡迷路，或陷泥潭，或觸碁石，侍從，失王所之，宮人，或有哭泣者，及晚，雨雪寒甚，人馬駱駝，死者多，妙清曰，我曾知是日有風雨，勅雨師風伯曰，乘輿上道，勿作風雨，既許之而食言如此，可憎之甚，西京父老，檢校太師致仕李齊挺等五十人，希妙清・知常旨，上表請稱尊號建元，知常等，因說王曰，大同江有瑞氣，此神龍吐涎，千載罕逢，請上應天心下順人望，以壓全國，王，以問，之氏，對曰，金國強敵，不可輕也，況兩府大臣，留守上都，不可偏聽一兩人之言，以決大議，王，乃止，妙清・壽翰等，嘗密作大餅，空其中，穿一孔，盛熟油，沉于大同江，油漸出浮水面，望之若五色，因言曰，神龍吐涎，作五色雲，此嘉瑞也，請百官表賀，王，遣公仁及叅知政事李俊陽等，審視之，時有業油翰者言，熟油浮水，則有異色，使善泅者，索得大餅，乃知其詐，元毀上書曰，妙清・白壽翰等，肆其姦謀，以恠誕之說，誑惑衆心，一二大臣及近侍之人，深信其言，上惑天聽，臣恐將有不測之患，請戮妙清等於市，以絕禍萌，不報，妙清又言，主上，宜長御大華闕，否則遣近臣，備禮儀設御座，置御衣，致敬如在，則福慶與親御無異，王，遣公仁・仲孚，奉御衣如西京行法事，十一年，直門下省李仲・侍御史文公裕等，上疏曰，妙清・白壽翰，皆妖人也，其言，怪誕不可信，近臣金安・鄭知常・李仲孚・宦者庾開，結爲腹心，屢相論薦，指爲聖人，又有大臣，從而信之，是以主上，不以爲疑，正人直士，皆疾之如讎，願速斥遠，言甚切直，不報，仲等，退而待罪，十二年，王，以妙清爲三重大統知漏刻院事，賜紫，初妙清，屢請巡御西京，而災異荐至，其黨，欺誣以爲無害，至是，固請西幸，欲濟逆謀，王，以大臣諫官言，不聽，右正言黃周瞻，阿妙清・知常意，又奏請稱帝建元，不報，十三年，妙清與分司侍郎趙匡・兵部尙書柳昂・司宰少卿趙昌言・安

仲榮等，據西京反，矯制，執副留守崔粹・監軍事李寵林・御史安至宗等，囚之，又遣偽承宣金信，執西北面兵馬使李仲并諸僚佐及列城守臣，皆囚西京監庫，凡上京人在西都者，無貴賤僧俗，皆拘之，遣兵，斷崑嶺道，又遣人，却發諸城兵，掠近道牧馬，皆入城，國號大爲，建元天開，號其軍曰天遣忠義，署官屬，自兩府至州郡守，並以西人爲之，僞批下，見者竊笑，匡・仲榮，從旁叱之，初仲榮，以佛事招集從衆，與妙清・柳浩等，結爲黨與，西人，因之陰令舉事，事集殺之，妙清與匡等，率城中文武，會觀風殿，號令諸軍，欲分數道，直趣上京，壽翰親舊在西京者，爲書招壽翰曰，西京已反，可抽身以來，壽翰子清・持遺壽翰，壽翰，以書奏之，王，召示公仁，公仁曰，是事可疑，難究真僞，姑祕之，有卒崔彥・韓善貞等，來奏曰，臣等，以事歸本鄉黃州，見西人，率兵至洞仙驛，執司錄高甫正，又取驛馬送西京，禁人往來京城者，吾等，晝伏夜行，從閒道來，王，乃召宰樞議之，命富弼・元敦及承宣金正純，會兵部治兵，爲討賊計，遂以富弼爲元帥，往征之，遣內侍柳景深・曹晉若・黃文裳，往西京宣諭戢兵，西人，開城門引入觀風殿，匡・匡，坐東，妙清，坐西，其餘文武，集殿庭，皆戒服，景深等，至殿門，匡等，下庭拜問聖體，饋酒食遣還云，當奉表奏聞，倉卒未果，請先以此歸奏，付書一封云，伏望主上，移御此都，不燃必有變，辭甚不遜，繼遣檢校詹事崔京，上表曰，陛下，信陰陽之至言，考圖讖之祕說，創大華之宮闕，象鈞天之帝都，臣等，同婁敬之矢謀，望盤庚之遷邑，豈期臣下，不禮宸衷，非徒懷土以重遷，抑亦防功而害事，人心可畏，衆怒難防，車駕若臨，兵戈可戢，表至，咸曰，以臣召君，可斬其使，王，欲息兵，乃賜京酒食・幣帛，命爲分司戶部員外郎，慰諭遣還，召問兩府大臣，將以是日出師，富弼等諸將，詔闕俟命，安等，謀緩兵期，以圖不軌，乃奏，引見金使受詔而後，移御大明宮，遣將，猶未晚也，或告安等，潛聚兵仗，私相偶語，陰謀不測，富弼謂諸相曰，西都之反，知常・安・壽翰，與其謀，不去此輩，西都未可得平，密諭正純，使勇士曳出三人，斬於宮門外，乃奏之，流妙清・黨陰仲寅・李純茂・吳元師・崔逢深于遠島，西人，至成州，矯制，執防禦官僚，散入人家飲食，州人，知其僞，擊殺五六人，囚二十餘人，馳聞，王獎諭，賜官僚藥各一銀合，將吏，幣帛有差，漣州吏康安世・中郎將金仁鑑，捕僞兵馬副使李子奇・將軍李英及卒六百餘人，王，又獎諭，賜錦二段・綵帛八匹諸城，聞之，擒殺西賊一千二百餘人，富弼大軍至，列城震懼，富弼，遣僚掾于西京，曉諭至七八，匡等，知不可抗，欲出降，猶豫未決，會金淳夫，賣詔入城，西人，遂斬妙清・匡及匡子浩首，遣尹瞻等，偕淳夫獻之，且自請罪，於是，梟三人首于市，下瞻獄，匡，意不免，復反，富弼，以城險，不急攻，列營持久，城中糧盡，驅出老弱者，富弼，知可取狀，築土山，設砲機，爲攻具，十四年，選銳卒萬餘，分三道進攻，賊兵大潰，匡，不知所爲，闔家自焚死，西都平，妙清・壽翰・知常・匡・匡等妻子，並沒爲奴婢，知常，初名之元，少聰悟，有能詩聲，擢魁科，歷官至起居注，人言，富弼素與知常，齊名於文字間，積不平，至是，托以內應，殺之，知常爲詩，得晚唐體，尤工絕句，詞語清華，韻格豪逸，自成一法。

- (16) 若江賢三著「漢代の『不敬』罪について」野口鐵郎編『中国史における乱の構図』所収，1986年刊，雄山閣出版，215頁参照。
- (17) 韓容根著『高麗律』1999年刊，書景文化社，184頁参照。
- (18) 辛虎雄著『高麗法制史研究』1995年刊，国学資料院，317頁参照。